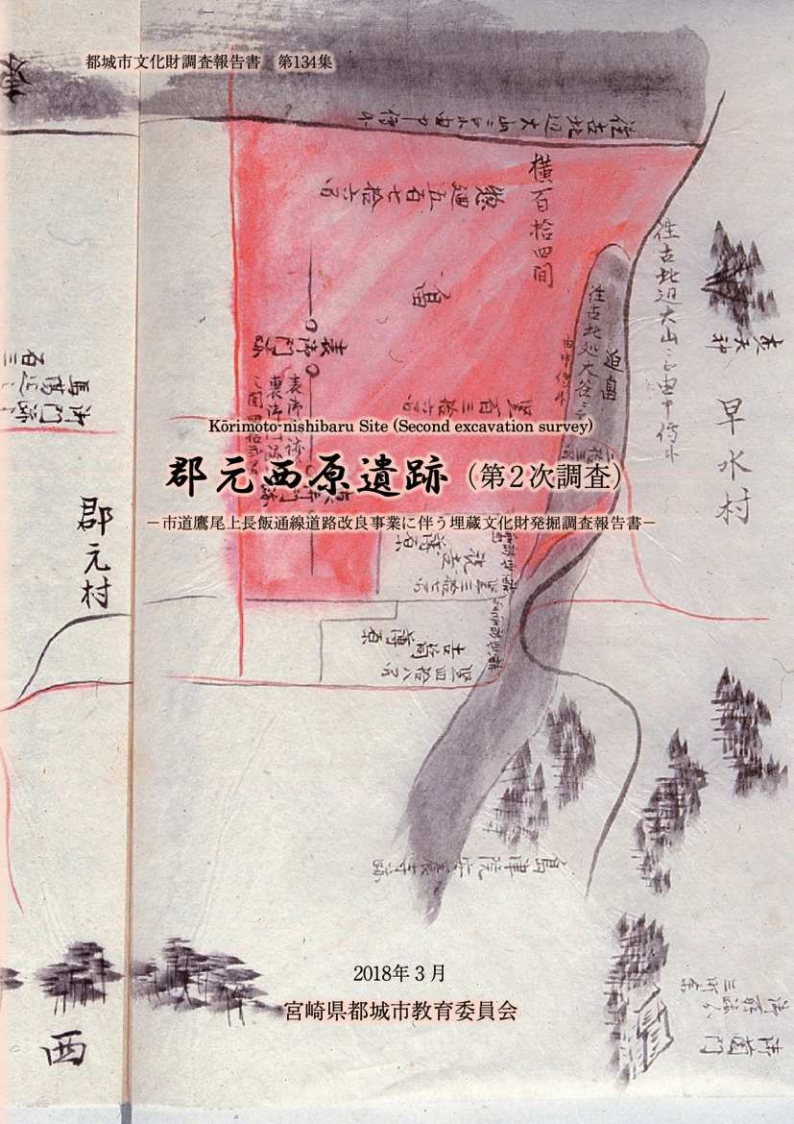
都城市文化財調査報告書　第134集



Kōrimoto-nishibaru Site (Second excavation survey)

郡元西原遺跡（第2次調査）

－市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2018年３月

宮崎県都城市教育委員会

Kōrimoto-nishibaru Site (Second excavation survey)

郡元西原遺跡（第2次調査）

― 市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

2018年3月

宮崎県都城市教育委員会

序　文

本書は、市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴い、都城市教育委員会が平成28年度に実施した都元西原遺跡の第２次発掘調査の報告書です。

本書に所収いたしました都元西原遺跡は、都城市都元町に所在しております。当該地一帯では、これまでに古代末から中世にかけての遺跡が数多く発掘調査されており、11世紀前半に成立した島津荘の開発拠点と目されている地域であります。今回の発掘調査地点から東南方向へ約570mの地点には、源頼朝から島津荘の管理を任され、島津家初代となった惟宗忠久が館を構えたとされる宮崎県指定史跡の祝吉御所跡が所在しています。

今回の都元西原遺跡の発掘調査では、堀状の遺構が発見され、大規模な囲繞施設である可能性が推察されました。この遺構は出土遺物の年代から11世紀代に構築されたと考えられ、島津荘が開発された年代に近いことがわかりました。これまでに島津荘の立荘・展開期の現地経営拠点の遺跡は確認されていませんでしたので、今回の調査成果は重要な発見であると思われます。

本書が都城市の地域の歴史や文化財に対する理解と愛護意識を深める一助になるとともに、全国一の規模を誇った島津荘成立の謎を解明するための学術資料として多くの方々に活用していただくことを希望しています。

最後となりましたが、発掘調査から本書刊行に至るまで、円滑な作業にご協力いただいた市民の皆様、関係諸機関に心より感謝申し上げます。

2018年３月

都城市教育委員会

例　言

1．本書は、市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴い、平成28年度に実施した都元西原遺跡の第２次発掘調査報告書である。
2．発掘調査は都城市教育委員会が主体となって、同市文化財課（平成28年度当時主幹）柴畑光博、同嘱託茨木浩一・川俣唱子が担当した。
3．本書で使用したレベル数値は海抜絶対高で、基準方位は真北である。
4．本書で使用した遺跡位置図は、都城市国土基本図の１万分の１を基に作成した。
5．現場における遺構実測は、柴畑・茨木・川俣のほか、文化財課主査山下大輔・同主査加覧淳一の協力を得た。
6．本書に掲載した遺構のトレース図は、文化財課嘱託の川俣と外山亜紀子が作成した。
7．本書に掲載した遺物の実測は、柴畑・川俣と整理作業員が行った。
8．現場での遺構写真撮影と出土遺物の写真撮影は柴畑が行った。また、空中写真撮影は、株式会社新和技術コンサルタントに委託した。
9．本書の遺物番号は通し番号とし、本文・挿図・写真の番号は一致する。
10．遺物観察表は外山が作成した。
11．土層と遺物の色調は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会議事務局監修）2001年度前期版を参考にした。
12．本書の執筆は、柴畑・近沢・川俣が行い、編集は柴畑・外山があたった。
13．発掘調査で出土した遺物とすべての記録（図面・写真など）は、都城市教育委員会文化財課で保管している。
14．遺物の注記の際の遺跡略号は、「KMNB2」とし、各遺構の略号に関しては、掘立柱建物跡は「SB」、土坑は「SC」、溝状遺構は「SD」、道路状遺構は「SF」、ピットは「P」とした。

目　次

【本文目次】

第１章　序説……１
　第１節　調査の経緯と経過……１
　第２節　調査組織……１
第２章　遺跡の位置と環境……２
　第１節　地理的環境……２
　第２節　古地図と空中写真の照合による郡元西原遺跡一帯の歴史的環境……４
　（1）各地図と方法……４
　（2）古記録と古絵図の検討……４
　（3）これまでの発掘調査の成果……７
第３章　郡元西原遺跡の第２次発掘調査……９
　第１節　調査の方法と概要……９
　第２節　基本層序……９
　第３節　先史時代の遺物……９
　第４節　古代末～中世の遺構・遺物……15
　（1）掘立柱建物跡（SB）……15
　（2）土坑（SC）……15
　（3）大溝（SD1）……20
　（4）溝状の道跡（SD6（SF3））……22
　（5）包含層出土遺物……28
　第５節　近世～近現代の遺構・遺物……30
　（1）溝状遺構（SD4）……30
　（2）溝状遺構（SD3）……30
　（3）溝状遺構（SD5）……30
　（4）溝状遺構（SD2）……30
　（5）道跡（SF1・SF2）……35
　（6）ピット（P34）……35
　（7）包含層出土遺物……35
第４章　まとめ……40
　第１節　郡元西原遺跡第２次調査地点における土地利用の変遷……40
　第２節　古代末～中世の大溝（SD1）について……40

【挿図目次】

第１図　都城盆地の地形……２
第２図　郡元西原遺跡位置図……３
第３図　祝吉御所跡の図（『庄内地理志』拾遺）……５
第４図　米軍撮影空中写真（1948年４月６日撮影）……５
第５図　都市計画図と従前図……６
第６図　都市計画図と祝吉御所の図及び発掘調査区……６
第７図　発掘調査区域図（周辺試掘調査地点含む）……８
第８図　桜島文明軽石残存区域と土層断面図……10
第９図　剥片類分布図……11
第10図　弥生土器・剥片類実測図……12
第11図　剥片類実測図……13
第12図　遺構全体図……14
第13図　掘立柱建物跡・ピット列実測図……16
第14図　ピット内遺物出土状況実測図……17
第15図　土坑実測図……18
第16図　ピット・土坑出土遺物実測図……19
第17図　SD1・SD6（SF3）平面図……21
第18図　SD1・SD6（SF3）断面図①……23
第19図　SD1・SD6（SF3）断面図②……24
第20図　SD6（SF3）出土遺物実測図①……25
第21図　SD1・SD6（SF3）出土遺物実測図①……26
第22図　SD1・SD6（SF3）出土遺物実測図②……27
第23図　SD6（SF3）出土遺物実測図②……28
第24図　包含層出土古代末～中世遺物実測図……29
第25図　近世～近現代遺構平面図……31
第26図　近世～近現代遺構断面図……32
第27図　近世～近現代溝状遺構出土遺物実測図……33
第28図　近現代溝状遺構出土瓦実測図……34
第29図　近現代溝状遺構出土遺物実測図……35
第30図　近現代ピット及び出土遺物実測図……36
第31図　包含層出土近世～近現代遺物実測図……36
第32図　郡元西原遺跡第１・２次調査遺構接合図……42

【表目次】

第１表　郡元西原遺跡（第２次）出土遺物観察表①……37
第２表　郡元西原遺跡（第２次）出土遺物観察表②……38
第３表　郡元西原遺跡（第２次）出土遺物観察表③……39

・表紙写真は、「祝吉御所の図」（『庄内地理志』拾遺所収）

第１章　序説

第１節　調査の経緯と経過

平成27年12月７日に、社会資本整備総合交付金事業の市道鷹尾上長飯通線道路改良工事予定地の埋蔵文化財の有無について、都城市道路公園課（以下、市道路公園課）から都城市教育委員会文化財課（市文化財課）へ照会があった。対象地の北側は、平成26年に同事業に伴って発掘調査を実施した郡元西原遺跡第1次調査地点である。平成28年１月20日に対象地を試掘調査した結果、中世の遺構・遺物が出土したため、郡元西原遺跡のエリアを拡大した。平成28年５月16日に、都城市長から宮崎県教育長宛に、市道鷹尾上長飯通線における郡元西原遺跡の工事通知が出された。同24日に宮崎県教育長から都城市長宛に工事着手前に発掘調査を実施するようにとの指示が出されたため、市文化財課が道路建設に伴い遺跡が影響を受ける範囲について記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘調査は、平成28年５月24日から平成28年８月15日まで行った（実調査日数30日）。７月７日には職場体験学習として、中学生２名を受け入れて発掘作業を体験してもらった。７月下旬から８月上旬にかけて、大規模な囲繞施設とみられる平安時代末の大溝が検出された。専門家等からは、これまで未発見であった島津荘の現地経営拠点の一部である可能性が高いという指摘もなされたため、８月23日に宮崎県教育長から都城市長宛に、重要な遺構の取扱いに関する協議依頼がなされた。これを受け９月６日に、宮崎県教育委員会文化財課、市道路公園課、市文化財課の３者で、大溝の現地保存のための道路工事計画の設計変更の検討を行い、同日の都城市長協議を経て、発掘された大溝の大部分を舗装道路下に保存することを決定した。９月17日には遺跡発掘調査成果の現地説明会を開催し、市内外から約350名の見学者があった。９月27日には道路工事請負業者が市道路公園課と市文化財課の立会いのもとに大溝の埋め戻し作業を行った。

出土遺物の水洗・注記作業は調査と並行して行った。平成29年度も引き続き遺物整理を進めて、遺構平面図・断面図の製図を行うとともに、遺物の実測・トレースを行って、発掘調査報告書の執筆・編集を進めた。

第２節　調査組織

発掘調査及び発掘調査報告書作成の調査組織は以下のとおりである。

平成28年度の組織（発掘調査実施年度）

調査主体者　都城市教育委員会

調査責任者　教　育　長　黒木　哲徳
　　教育部長　兒玉　貞雄
　　文化財課長　山下　進一郎
　　文化財課副課長　武田　浩明

調査担当　文化財課主幹　桑畑　光博
　　文化財課嘱託　茨木　浩一（平成28年７月５日まで）
　　川俣　唱子

発掘調査従事者　竹原安男、倉内明信、堀内美利、瀬之口藤則、上西政美、木上保、松崎昇司、津曲節子、小田透、福重光夫、山口護、段秀敏、新原幸春

平成29年度の組織（発掘調査報告書刊行年度）

調査主体者　都城市教育委員会

調査責任者　教　育　長　黒木　哲徳（平成30年２月24日まで）
　　教育長職務執行者　小西　宏子（平成30年２月25日から）
　　教育部長　田中　芳也
　　文化財課長　武田　浩明

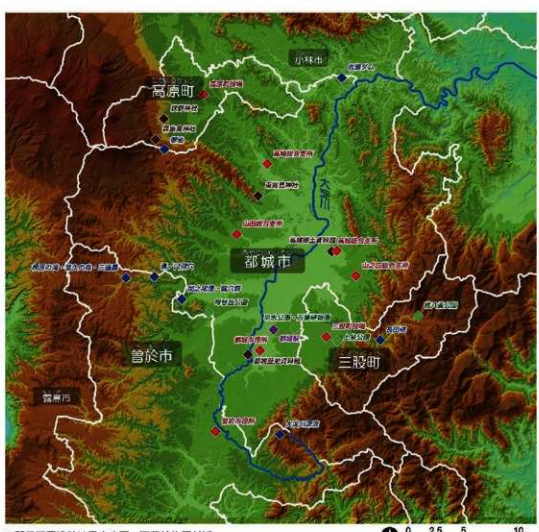
報告書担当　文化財課副課長　桑畑　光博
　　文化財課副主幹　近沢　恒典
　　文化財課嘱託　川俣　唱子、外山亜紀子

整理作業従事者　内村ゆかり、川野栄子、水光弘子、新徳より子、矢上由香利、園田孝子

第２章　遺跡の位置と環境

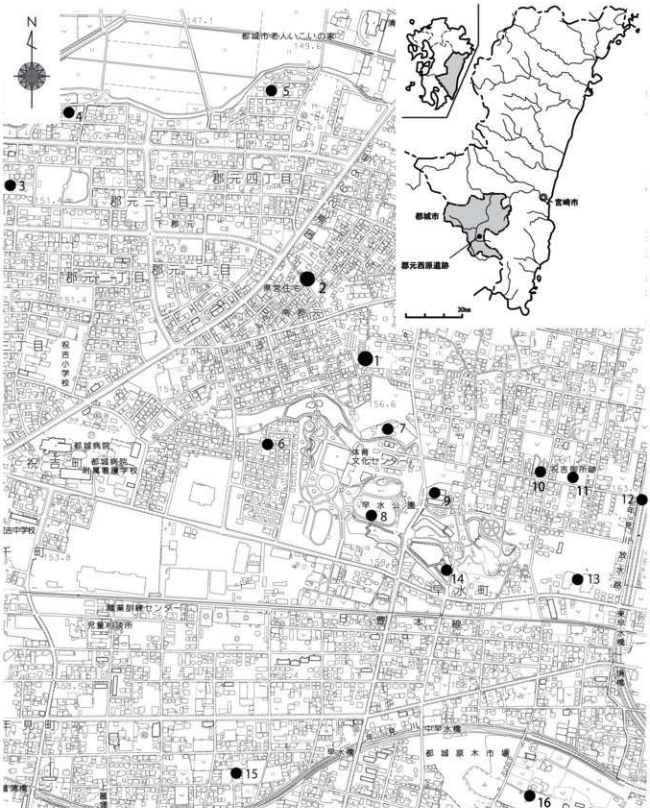
第１節　地理的環境

郡元西原遺跡は宮崎県都城市郡元町に所在する。都城市は九州東南部、宮崎県の南西部に位置し、鹿児島県との県境に接する内陸部盆地である都城盆地のほぼ中央部を占める（第１図）。同盆地は大淀川上流域に広がる広大な盆地であり、南北約30km、東西約15kmの楕円状をなしている。北西に霧島火山群を仰ぎ、西側を甑山や白鹿山などの山地に、東から南を鰐塚山・柳岳を主峰とする山地に囲まれ、盆地西南方は、東側や北西にみられるような山地はなく、緩やかに南方に向かって高度を増すシラス台地が広がっており、わずかに開かれた地勢を呈する。盆地の中央を南から北へ向かって大淀川が貫流しているが、盆地の地形はこの大淀川を境に東西で大きく異なる、すなわち盆地西側には標高150～180mのシラス台地が広く展開し、盆地東側には火山性薄層扇状地と呼ばれる地形が発達している。この扇状地は火砕流堆積物や火山性泥流堆積物の上に薄く礫層がのるもので、鰐塚山地より流出する諸河川によって浸食されて河岸段丘を形成している。1983年刊行の都城・北諸県地域土地分類基本調査によれば、郡元町付近はその扇状地状の河岸段丘面の中の一万城扇状地と呼ばれる地形面に含まれる。郡元西原遺跡は、その地形面の中央部に立地し、旱水神社を起源とする湧水点から西へ走向する浅谷の北側に位置する（第２図）。現況の標高は約157mであり、南側の水田地帯とは約0.5mの段差を有している。



※郡元西原遺跡は旱水公園・万葉植物園付近

第１図　都城盆地の地形（国土交通省　平成28年度 地下水の見える化調査図版集より）



1. 郡元西原遺跡　2. 南畑遺跡　3. 祝吉遺跡　4. 松原地区遺跡　5. 久玉遺跡　6. 牟田ノ上遺跡
7. 白山原遺跡　8. 池ノ友遺跡　9. 池島遺跡　10. 祝吉御所跡　11. 祝吉第３遺跡　12. 樺山・郡元地区遺跡
13. 天神原遺跡　14. 沖水古墳　15. 年見川遺跡　16. 立野向原遺跡

第２図　郡元西原遺跡位置図（S=1/10,000）

第２節　古地図と空中写真の照合による郡元西原遺跡一帯の歴史的環境

郡元西原遺跡の所在する郡元町は、中世の島津院と呼ばれる区域の中央に位置し、万寿年間（1024～1028）に大宰大監平季基が立荘したと伝えられ、その後の院政期に格段の発展を遂げて国内最大級の荘園となった島津荘の成立拠点となった場所と推定されている。元暦２年（1185）に島津荘下司職に補任されのちに島津姓を名乗った惟宗忠久が館を構えたとされる「祝吉御所跡」は宮崎県指定史跡として、郡元西原遺跡の西南方約570mの地点に所在する。

ここでは、古絵図と圃場整備時の従前図を現代の地図に重ね合わせる作業を踏まえた上で、既往の発掘調査地点の成果も重ねあわせながら、郡元西原遺跡一帯の歴史的環境をみていきたい。

(1) 各地図と方法

使用した地図は以下の４つである。

・「都市計画図」。都城市作成。平成26年（2014）発行。縮尺2500分の１。

・「従前図面」（以下、従前図と略記）。都城市祝吉土地改良区作成。都城市教育委員会所蔵。昭和39年（1964）年10月作成。昭和39年度（1964）圃場整備にあたっての従前図。縮尺約1000分の１。

・「祝吉御所跡の図」（第３図・以下、古絵図と略記）。文化・文政年間に都城島津家が編纂した「庄内地理志　拾遺」に掲載された絵図。

・「空中写真」（第４図）。米軍撮影。国土地理院所管。昭和23年（1948）撮影。縮尺約10000分の１。

地図の覆写は、イラスト作成ソフトAdobe Illustratorを使用して都市計画図に従前図面を重ね合わせ、その地図から読み取れる旧道及び神社等の位置関係を基にして、古絵図との対応関係を考え、古絵図に示された祝吉御所跡伝承地及び周辺の状況を現代の都市計画図に推定復元した。各地図等の重ね合わせにあたっては、地図を数枚から数10枚に分割し、各ブロック個別に拡大・縮小、角度を変化させて調整した。

従前図を都市計画図に重ね合わせる際には、従前図を９枚に分割した。従前図は作成年代が新しい事もあり、縮尺を合わせつつ角度を約８度西へ傾けることで、現代に残る旧道部分とほぼ合致した。この図からは祝吉御所跡記念碑の位置が耕地整理前と現代とでほぼ同一である点、当時、門跡・馬乗馬場などの伝承地が残っていた点がわかる。なお、南東隅の楕円形の区画は競馬場跡である。

上記の方法で作成した第５図と空中写真（第４図）とを比較してみると、旧道及び地形の変化点等の位置関係はほぼ一致しており、20世紀前半の当該地における位置関係を比較的正確に示していると考えられる。また、従前図の区域外においては、空中写真を参考に古くからの道筋を太線で示した。

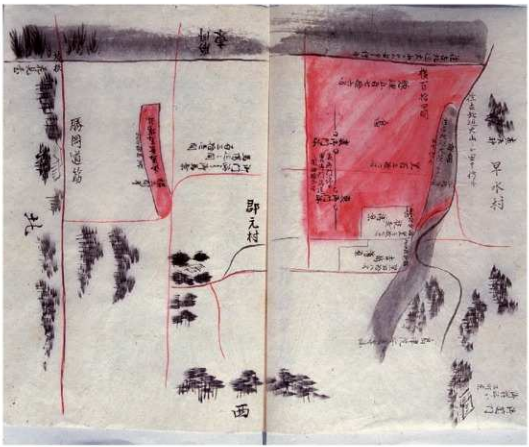
古絵図は方位に準拠する格子目状の道筋による区画が描写されているように見える。しかし、第５図と比較した場合、各道筋にある程度の対応が見られる。そのため、今回は古絵図を42枚に分割し、各道筋及び地形の対応状況を根拠として、重ね合わせた。勝岡道筋は古絵図以外では北東―南西方向へと伸びている。また、庄内地理志に収録された当該地域を記した別の絵図においても、現代の地図と同様な位置関係であるため、その部分を約12度北へ傾けた。祝吉御所伝承地周辺の道筋は近現代の地図と相対的な位置関係は対応する。この道筋に合わせて古絵図を配置した。調整は勝岡道筋の部分の角度を傾けた上で、全体を横方向（東西）に12%拡大し、道筋に合わせて全体を拡大したのみである。

今回の作業をまとめたものが第６図である。現記念碑より東側が祝吉御所伝承地の範囲と推定される。また、古絵図、従前図、都市計画図いずれの地図においても近似の場所を同伝承地としている点も確認できる。この点からは、19世紀から21世紀にかけて同伝承地として認識される場所がほとんど変化していない状況だったのではないかと考える。ただし、古絵図に示された距離と地図上の距離と対比すると、計測地点によっては近似値を示す場合もあるが、多くは絵図記載の数値よりも大きな距離となっている。

(2) 古記録と古絵図の検討

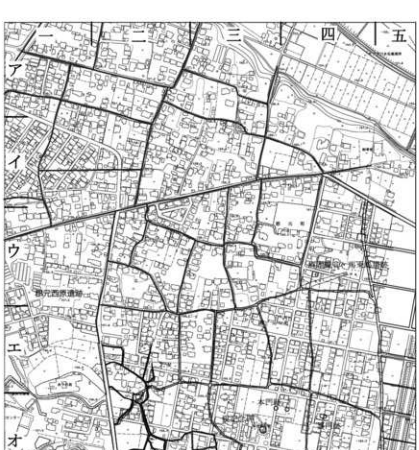
庄内地理志では、島津は郡元の古い名称であり、庄内（都城盆地一帯）を「嶋津之御荘」、郡元を「嶋津之院」とし、島津家初代島津忠久が「祝吉」にあったとき「地名を以御家号」としたとする。さらに、安養寺、島津稲荷などの仏像、棟札に残る「島津御荘」の例をひく。

祝吉御所に関する記述は、19世紀においては、門跡と伝承される石を積み上げた塚２基が存在するのみであり、基本的には絵図に記されるように畑地が広がる状況であったと考えられる。また、馬乗馬場に関しては、その区画が畑地として利用されていた様相がうかがえる。

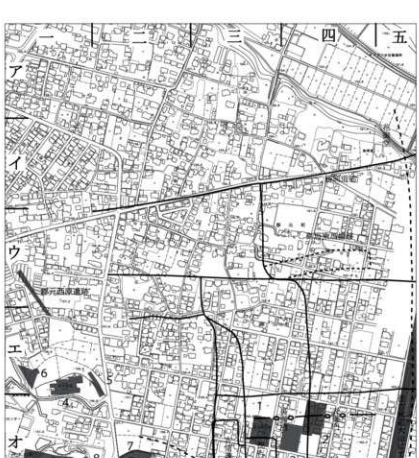


第３図　祝吉御所跡の図（『庄内地理志』拾遺）

第４図　米軍撮影空中写真（1948 年 4 月 6 日撮影）



第５図　都市計画図と従前図面



第６図　都市計画図と祝吉御所跡の図及び発掘調査区

昭和４年（1929）から昭和17年（1942）にかけて編纂された「稿本　都城市史」では、祝吉御所は「面積凡そ三反歩」で以前は「茅野原」であったが、明治２年（1869）以降に開墾され、開墾にあたってはその一部に「塚を築き其遺跡を止る事」とし、現在はその付近に碑が建てられていると記載される。「茅」の意が葉が細長くとがった草の意味であって菅や薄等の総称である点、反数が近似値にある点より、この場所は古絵図の「祝吉薄原」に該当する可能性が高い。この点からは現在の指定地及び史跡公園の直接的な始祖が明治期の開墾にあった事がわかる。また円柱の伝承地については、径、高さが１m程度のものであったと理解される。馬乗馬場に関しても区画を残したまま畑地として利用された状況が20世紀前半にも継続していたことがわかる。

ちなみに、本報告書で取り扱う郡元西原遺跡の場所には古絵図中に地名や伝承地等の記載や注記は認められず、19世紀には集落は存在せず、原野か山林であったと推定される。

(3) これまでの発掘調査の成果

郡元町一帯では開発事業等に伴い多くの発掘調査が実施されている。現状の遺跡分布状況を俯瞰すると、遺跡がまとまるエリアは、北郡元地区（祝吉遺跡・松原地区遺跡群・久玉遺跡）、南郡元地区（祝吉第３遺跡・樺山・郡元地区遺跡群・天神原遺跡）、早水地区（牟田ノ上遺跡・池ノ友遺跡・池島遺跡）の大きく３つに分けられている。第６図に南郡元地区と早水地区の各遺跡の位置を示した。

郡元西原遺跡の位置は、早水地区の遺跡群の北端に位置する。早水地区の遺跡は先行研究で多く指摘されるように11世紀代の遺跡形成が特徴的であり、池島遺跡の初期高麗青磁等の優品の出土、池ノ友遺跡や池島遺跡の円形周溝墓より「何らかの階層を持つ人物」の存在が想定される。円形周溝墓は肥前国周辺域に系譜の起源が指摘される墓制であり、肥前平氏系の府官と推定される平季基の南九州進出との関連性も示唆される。この地域ではおおむね15世紀まで継続して遺跡が営まれている。位置が推定できた地名とその付近の調査事例としては、安養寺跡周辺域と池島遺跡、御園門周辺域と池ノ友遺跡があるが、伝承と合致するような遺構・遺物は確認できない。発掘調査によるものではないが、沖水古墳から軽石製円筒形外容器・経筒・湖州鏡が発見されている。平安時代末に埋納されたものと思われる。

南郡元地区は祝吉御所伝承地とその周辺域にあたるが、主体となる時期は祝吉第３遺跡の13世紀から14世紀、天神原遺跡の13世紀後半から15世紀前半、樺山・郡元地区遺跡群の14世紀から15世紀前半であり、祝吉御所に関する伝承年代とは乖離している。位置が推定できた地名とその付近の調査事例としては、祝吉第３遺跡と祝吉御所伝承地、森天神付近と天神原遺跡、古絵図で「往古此辺大山にて候由申伝候」と記されている付近の樺山・郡元地区遺跡があるが、伝承と合致するような遺構・遺物は確認できない。ただ、樺山・郡元地区遺跡群Ⅴ区の南端部で確認された埋没した谷地形は、古絵図に記載された「往古此町大谷」に符合しており、東から西方向へのびる埋積された谷地形の可能性が考えられる。

特筆すべき遺構としては、祝吉第３遺跡（第１次調査）で検出された南北方向にのびる幅４m以上の中世の大溝（SD－２）があげられる。これは祝吉御所に直接的に関連する遺構ではないものの、北郡元地区の松原地区遺跡群にみられるような大規模な溝状遺構で囲まれた居館的施設が存在していた可能性が想起される。また、大溝のラインが第３図の道筋とほぼ重複する点は、19世紀代の道筋に中世の区画が踏襲されている部分があることを示している。

13世紀代から活発化する当該地域の集落形成に関し、天神原遺跡では15世紀、樺山・郡元地区遺跡群では16世紀以降、それまで活発に形成されていた集落が断絶し、特定の集落へと集約される状況が指摘される。横山哲英氏は「中世から近世への過渡期に何らかの制約・目的の下、集落の再編成がおこなわれた」可能性を想定している。この指摘からは、19世紀代の古絵図・古記録にみられる畑地主体の土地景観形成の画期が17世紀代にあったことが推測される。

以上のようなこれまでの発掘調査の成果は、次のようにまとめられる。早水地区では、11世紀代から遺跡形成が開始され、大規模遺構や輸入陶磁器の優品の出土などからは、島津荘の現地経営に関連する性格を有する遺跡群であった可能性が考えられる。都城盆地では12世紀中頃以降、南部城を中心に遺跡数が増加し、開発の展開期と位置づけられるが、当該地周辺域では13世紀以降が遺跡形成城拡大化の主体期となるようであり、12世紀末にあたる祝吉御所の伝承と積極的に結び付けられる遺跡は確認できない。その後の17世紀における集落再編の動きは、古絵図・古記録に示される土地景観をもたらした直接的な契機の可能性がある。　　（文責：近沢恒典）

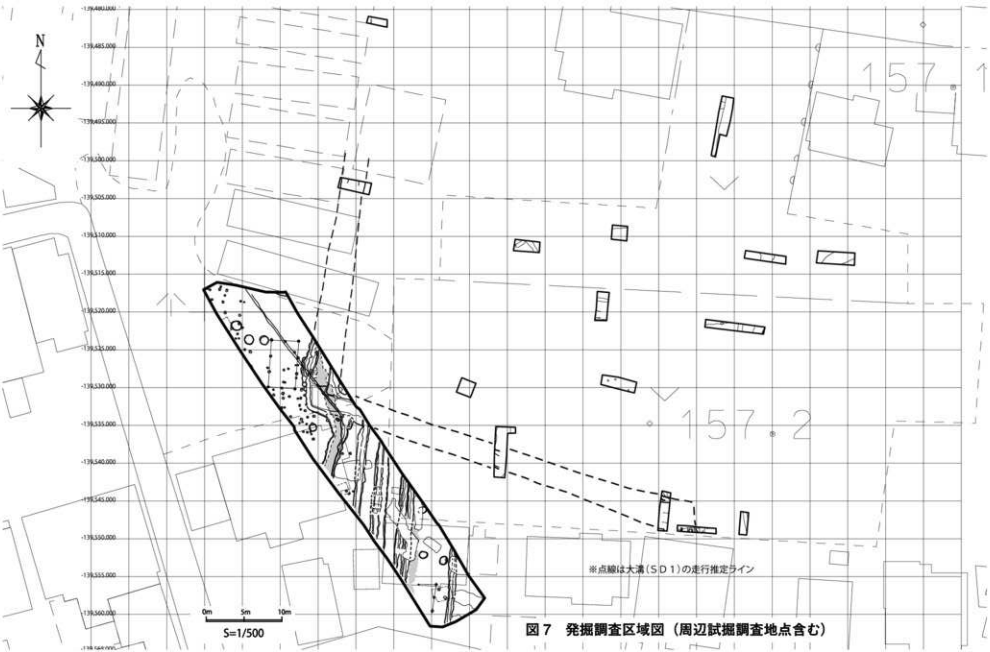


図７　発掘調査区域図（周辺試掘調査地点含む）

第３章　郡元西原遺跡の第２次発掘調査

第１節　調査の方法と概要

発掘調査区域は、平成26年度に実施した第１次調査区域の南端にあったコンクリート壁を重機で除去した後、以南の表土を剥ぎ取った。基本的に試掘調査の際に遺物包含層とされた黒色土（Ⅲ層）上面から精査を行うこととしたが、表土剥ぎ時に調査区域の南半部では部分的に表土直下の黒褐色～褐灰色土（Ⅱ層）から遺物が出土したため、Ⅱ層についても人力で掘り下げた。当該区域に関しては、現代のゴミ穴等の掘削による撹乱が多数認められたが、Ⅱ層系の埋土をもつ溝状遺構が４条（うち２条はそれぞれ２条の溝が切り合いながら重なっている状態が認められたため、最終的に６条となった）並行して走向していることが判明し、ほかに道跡２条とピット１基も確認された。他方、調査区北半部については、Ⅲ層上面において、桜島を噴出源とするテフラが筋状に残存している状況が確認されたため、その広がりを把握した上で断面図を作成した。Ⅲ層からは古代末～中世の遺物が出土したが、調査区北側の一部では、Ⅲ層とⅣ層（霧島御池軽石層）の境界レベル付近において砂岩製の剥片や残核と思われる石片が出土した。当該層準で古代末～中世にかけての遺構群が確認され、特に調査区の北半部では、試掘調査時にも把握されていた規模の大きな落ち込みが確認され、古代末から中世にかけての大溝であることが判明した。他に溝状の道跡１条、掘立柱建物跡１棟、ピット列１基、建物として認定できなかったピット68基、土坑７基も検出された。

第２節　基本層序

表土となるⅠ層は褐灰色砂質の現・旧耕作土を基本とするが、宅地化されていた調査区域の南側においては、砂利などの客土となる。

Ⅱ層は黒褐色～灰褐色砂質を基調とするが、黄色軽石ブロックや黒色土ブロックを含んでおり、地点によって若干の違いが認められる。近世から近現代にかけての遺物包含層である。調査区域南側で検出された溝状遺構の埋土の母材となっており、主として人為的な営為による攪拌が著しい。

調査区域の北側では、Ⅱ層とⅢ層との間に部分的ではあるが径５㎜以下の灰白色を呈する軽石が薄く堆積している（第８図）。この軽石層は室町時代の文明年間（15世紀後半）に桜島が起こした大規模噴火に伴う降下軽石層である。同層中には灰白色の粗粒火山灰の小塊が混在しており、本来、軽石層の上部に成層していたものが人為的に攪拌されているものと思われる。この軽石層は、後述する古代末～中世の大溝の上面では最大層厚約20cmに及び、比較的明瞭に観察され、平面的には南北方向に溝状あるいは筋状に等間隔で確認された。都城市内のこれまでの遺跡発掘調査において畝状遺構や小溝状遺構などと呼ばれているものに該当するが、これは、軽石と粗粒火山灰の降下堆積後に溝を掘り、その溝の中に軽石と粗粒火山灰を埋却したものと考えられる。天明３年（1783）の浅間山噴火の際の「灰掻き溝」や桜島大正３年（1914）噴火の際の天地返法と共通するものと判断される。以下の検出遺構の項目では触れないので、この項目で軽石埋却溝として記載した。

Ⅲ層は黒色シルトであり、５㎜以下の黄色軽石を含む。後述する分厚い降下軽石層（Ⅳ層）の上位に形成された、いわゆる黒ボク土で、縄文時代から中世にかけて形成された地層である。本発掘調査地点では古代末から中世にかけての遺物が出土し、弥生土器も少量出土した。また、古代から中世にかけての遺構埋土の供給源となっている。

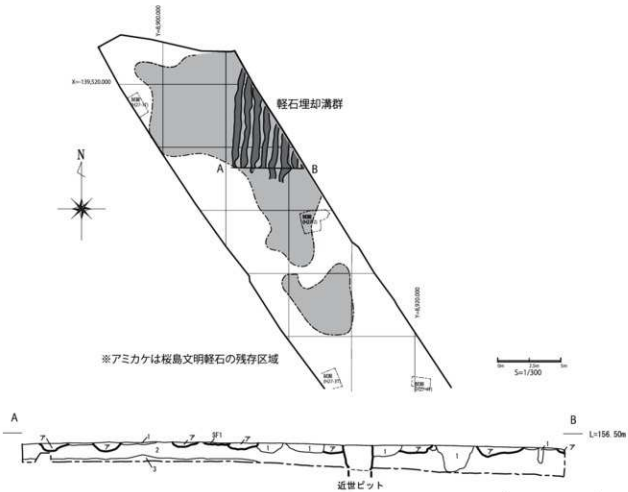
Ⅲ層下部からⅣ層上面にかけては、径1cm以下の黄色軽石を比較的多く含み比較的かたくしまる黒色～黒褐色シルト層がある。降下軽石層のⅣ層が土壌化した地層である。これをⅢ・Ⅳ漸移層とする。調査区北部では、この層と上位のⅢ層下部にかけて砂岩製の剥片・残核が検出された。

Ⅳ層は１cm以下の黄色軽石層である。軽石以外に岩片も含まれる。較正暦年代で約4600年前の霧島御池を起源とする降下軽石層であり、当該地では層厚約80cmを計る。

上記以外に、後述する古代末～中世の大溝の埋土下層と近世～近現代の溝状遺構であるSD4の埋土上層にレンズ状の火山噴出物とみられる堆積物が確認された。前者は、12世紀以降に活動を活発化させた霧島御鉢起源のテフラの可能性があり、後者は桜島起源の大正噴火に伴うテフラの可能性がある。

第３節　先史時代の遺物

基本層序の項目で触れたように、調査区北側の約７m四方の範囲においてⅢ層下部からⅢ・Ⅳ漸移層上面にかけて



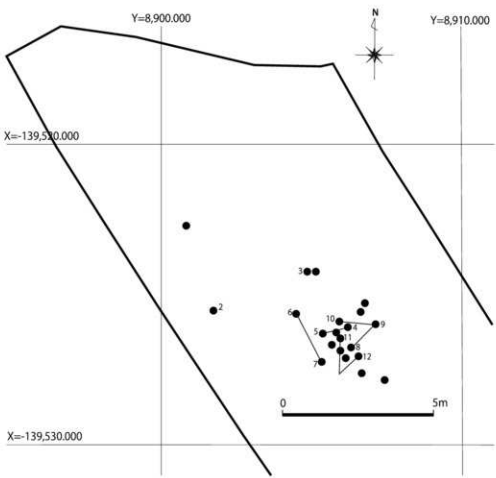
第８図　桜島文明軽石残存区域と土層断面図

桜島文明軽石埋却溝群検出状況

桜島文明軽石埋却溝土層断面

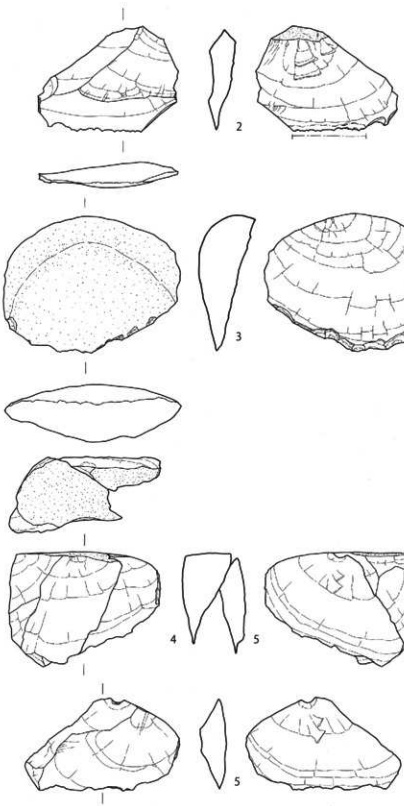
砂岩礫の剥片・残核等21点が検出された（第９図）。それらには接合するものもあり、使用痕の確認される剥片石器と認められるものも確認された。これらの状況から、この一帯では人頭大未満の砂岩円礫を母岩として、剥片を剥出する行為の行われた石器の製作地であると判断された。剥片類が検出された場所の当該層からは、土器の出土は確認されておらず、これらの所属時期については明確なことがわからないが、この地点から南へ約20mの地点でⅢ層から弥生土器が出土している。**2**は若干他の砂岩とは材質が異なっており、やや硬質の良質な砂岩を用いた剥片石器である。刃部に微細剥離が認められるとともにコーングロスとみられる光沢も観察されるため、イネ科植物等の刈り取りに使用されたものと考えられる。**3**は片面に自然面を残し、縁辺には剥離により刃部が作り出された剥片石器である。**4**・**5**、**7**・**6**、**8**・**9**・**10**、**11**・**12**は接合関係の認められたものである。**5**や**7**には使用痕は確認されないが、上述した**2**と似通った規格である。これらを観察すると**2**のような粗製の剥片石器を多数取り出そうとしていたようすがうかがわれる。

調査区域の南側、道跡（**SF3**）の硬化層直下のⅢ層から弥生時代の土器底部１点が出土した（**1**）。小型の壺か鉢の底部と思われる。胎土にいわゆるキンウンモを含むことから中期のものと判断した。



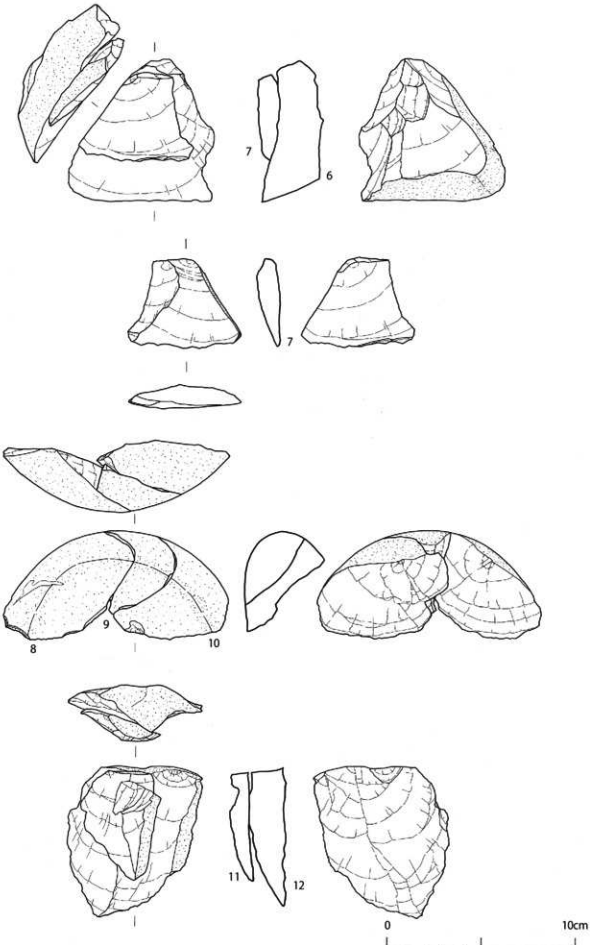
第９図　剥片類出土分布図

0 10cm

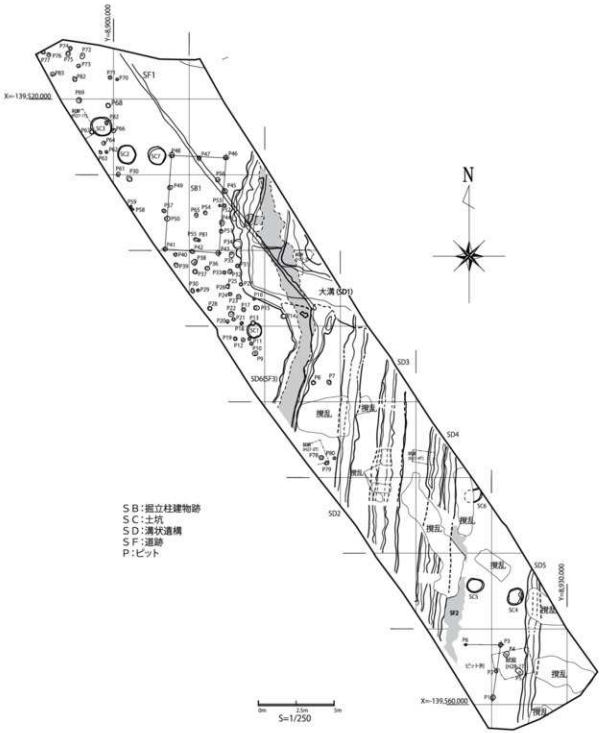


0 10cm

第 10 図　弥生土器・剥片類実測図



第 11 図　剥片類実測図


Y=8,900,000
X=-139,520,000
SF1
SB1
SC1
SC2
SC3
SC4
SC5
SC6
SC7
SC8
SD1
SD2
SD3
SD4
SD5
SD6(SF3)
大溝(SD1)
N
撹乱
SB：掘立柱建物跡
SC：土坑
SD：溝状遺構
SF：道跡
P：ピット
Y=8,930,000
X=-139,560,000
0m
2.5m
5m
S=1/250

第 12 図　遺構全体図

第４節　古代末～中世の遺構・遺物

(1) 掘立柱建物跡（SB）

掘立柱建物跡のSB1は、調査区北側において、大溝の西側に沿うようなかたちで検出された。桁行３間（6.4m）・梁行２間（3.6m）の南北棟の建物跡である。桁行長は約6.4m、梁行長は約3.6mであり、桁行柱間は２～2.1m、梁行柱間は1.7～1.8mである。柱穴はP41～50で構成される。柱穴（柱掘方）は径35～25cmの円形ないし隅丸方形となり、検出面からの深さ40～25cmである。埋土は基本的に黒色土であるが、軟質の部分とややしまる部分に分かれる。軟質の部分は柱痕跡と思われる。柱穴の埋土からは、土師器片（13～15）が出土している。P44から出土した13は土師器坏口縁部、P42から出土した14は瓦器椀を模したような黒色土器の口縁部で外面・内面に横方向の丁寧なミガキが施されている。P49から出土した15は糸切り離し痕の認められる土師器坏底部である。

ピット列は、調査区南側において検出した。P1～P3が柱間約1.8mに等間隔で南北一列に並ぶが、その西側が調査区域外となるため、掘立柱建物跡とは認定できなかった。P1とP3は径36～30cmの円形で、検出面からの深さは35～25cm、P2は径約20cmの円形で、検出面からの深さは約20cmである。

P68は、包含層であるⅢ層の掘り下げ中に土師器小皿と東播系須恵器が出土したために出土状況の写真撮影と実測を行ってさらに掘り下げたところ、その下から検出された柱穴である。包含層掘り下げ中における断面はできなかったが、出土状況からみて、柱を抜き取ったあとのピット内に土器類を一括埋納したものと推定された。22～24はP68の一括資料である。22・23は底部の切り離しがヘラ切りの土師器小皿である。一番上から出土した22の口縁部の約３分の２は欠損していたが、23は口径約８cmを測る完形品である。口径・底径ともに22がやや小さめではあるが、胎土と調整は23と似通っている。23の内面見込みにはタール状の黒色物質が付着している。22と23に挟まれるように出土した24は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。内面は使用による磨耗痕が観察される。森田稔氏編年の第Ⅲ期第１段階に該当するもので、13世紀代に位置づけられる。22・23の小皿と同様の法量・切り離し技法の小皿は、都城市高崎町鳩園遺跡の配石遺構１号で中野晴久氏編年の常滑焼５型式（13世紀前半）の三筋壺と共伴しており、P68の一括資料が13世紀代に位置づけられることはほぼ確実と思われる。

その他のピット埋土からの出土遺物は、P12とP31から底部の切り離しが糸切りの土師器坏（16・17）、P13から棒状の鉄製品（25）、P82から底部切り離しがヘラ切りの土師器坏（18）が出土した。また、P21からは、貿易陶磁器の陶器耳壺と思われる破片（19～21）がまとまって出土した。同一個体と考えられるものの、全形復元はできなかった。大宰府貿易陶磁貯蔵具編年の中世Ⅱ～Ⅲ期（12世紀後半～13世紀前半）に位置づけられると考えられる。P12・P13・P21・P31はSB1の南側、後述する大溝隅角の西側付近に密集して検出された20基を超えるピット群の一部である。ピット群は径20～30cmの似通った規模をもつもので、限られた調査区域の範囲内では建物跡として認定できなかったが、この付近に何らかの建物が存在し、何度も建替えられたことを示しているものと推定される。

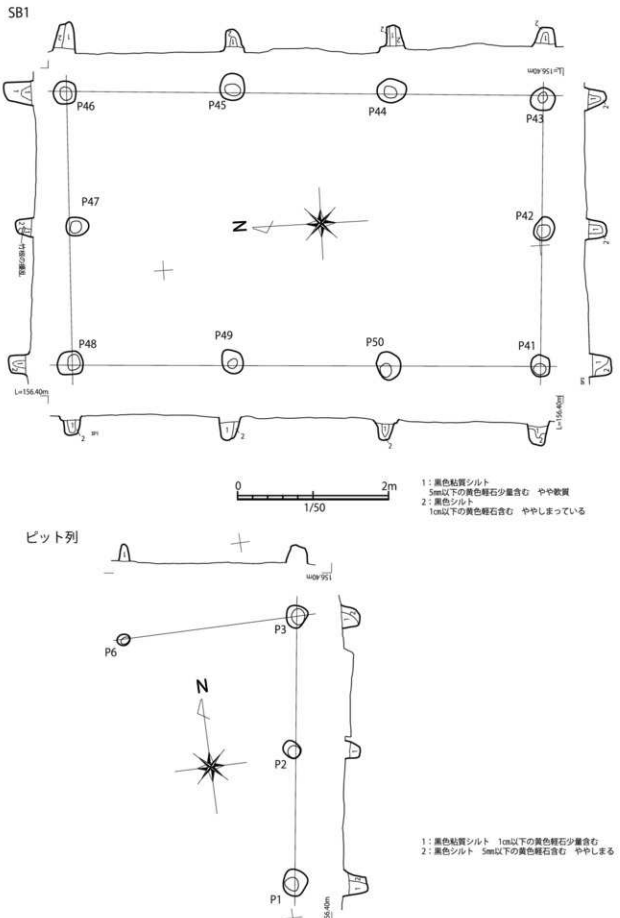
(2) 土坑（SC）

土坑は、平面形が円形プランの浅いタイプの土坑が６基（SC1～5・SC7）検出され、全容が不明の土坑が１基の合計７基が検出された。SC2・SC3・SC7は調査区北側において約１m間隔で近接して検出された。また、SC4とSC5も調査区南側で並んで検出された。

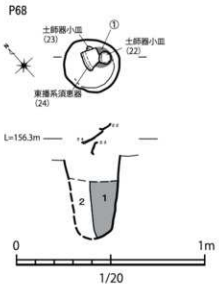
SC1は平面形円形プランを呈し、径約１mで検出面からの深さ約８cmである。埋土を掘り下げる過程でP13と切り合い関係にあることが判明したが、新旧は判断できなかった。底面はほぼ平坦である。埋土から底部の切り離しが糸切りの土師器小皿（26）と白磁椀胴部（27）が出土した。白磁は大宰府分類白磁椀Ⅳ・Ⅴ・Ⅻ類のいずれかと思われる。

SC2は平面形円形プランを呈し、径約1.2mで検出面からの深さ約10cmである。底面は中央が若干くぼんでいる。埋土から底部切り離しが糸切りの土師器小皿（28）が出土した。

SC3は平面形円形プランを呈し、径1.2～1.4mで検出面からの深さ約15cmである。土坑西側の一部を試掘調査時のトレンチによって掘削されており、P67との切り合いも判明したが新旧関係は不明である。底面はほぼ平坦である。土坑東側の埋土の上部に砂岩礫が２個重なって検出されたが、これらは本来、SC3を切るP82に伴うもので、そのうちの１点（33）の表面にはススの付着が認められた。33は石皿の転用品と思われるが、これらの礫はP82に埋め込まれた根石ではないかと推察される。埋土からは、ほかに土師器坏の口縁部（29・30）が出土した。



第 13 図　堀立柱建物跡・ピット列実測図



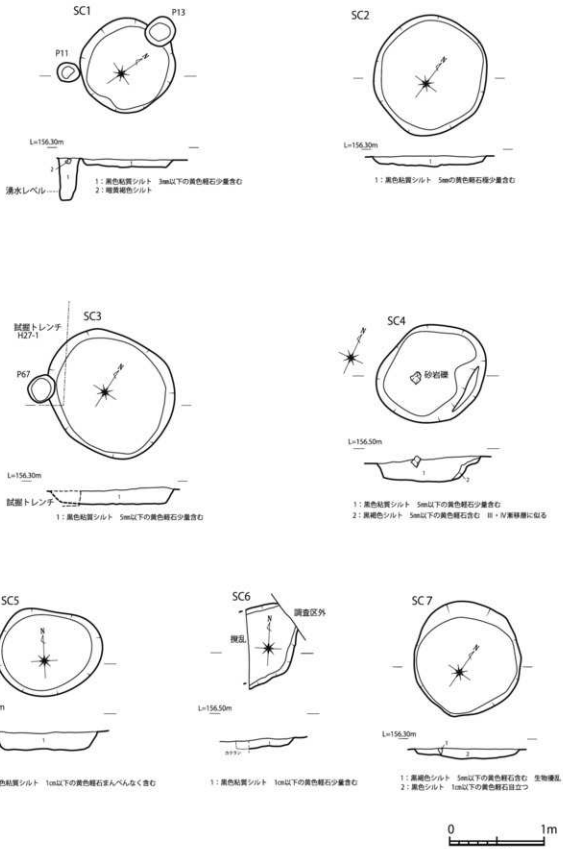
1：黒色粘質シルト　黄色軽石少量含む
2：黒色シルト　黄色軽石含む しまる

第 14 図　ピット内遺物出土状況実測図

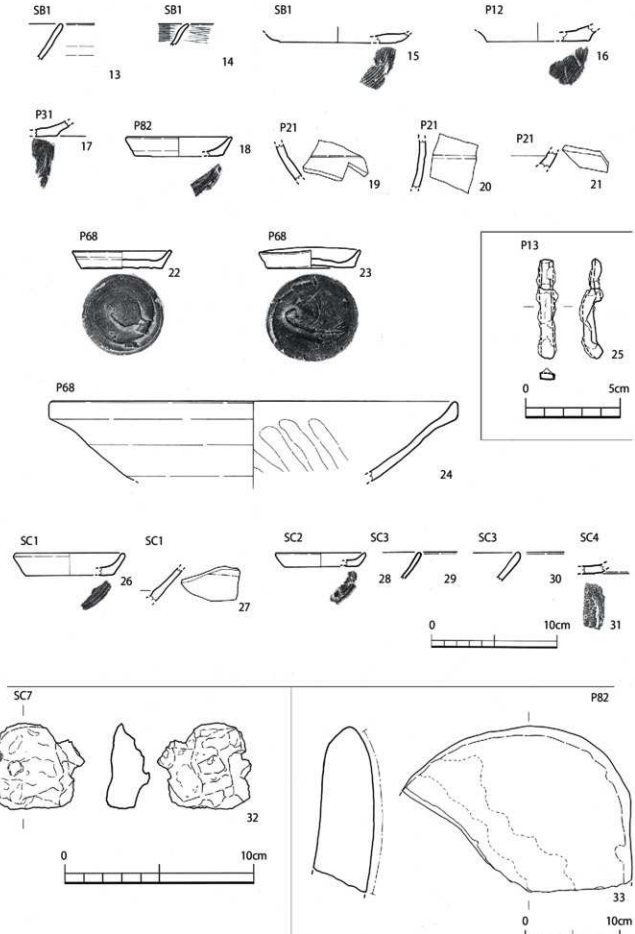
P 68 遺物検出状況（22・24）

P 68 遺物検出状況（23）

掘立柱建物跡（ＳＢ１）完掘状況


SC1
P13
P11
L=156.30m
湧水レベル
1：黒色粘質シルト　3mm以下の黄色軽石少量含む
2：暗黄褐色シルト
SC2
L=156.30m
1：黒色粘質シルト　5mm以下の黄色軽石極少量含む
試掘トレンチ
H27-1
SC3
P67
L=156.30m
試掘トレンチ
1：黒色粘質シルト　5mm以下の黄色軽石少量含む
SC4
砂岩礫
L=156.50m
1：黒色粘質シルト　5mm以下の黄色軽石少量含む
2：黒褐色シルト　5mm以下の黄色軽石含む　Ⅲ・Ⅳ黒味層に似る
SC5
L=156.50m
1：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色軽石まんべんなく含む
SC6
調査区外
腰巻
L=156.50m
1：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色軽石少量含む
SC 7
L=156.30m
1：黒褐色シルト　5mm以下の黄色軽石含む　生物壊乱
2：黒色シルト　1cm以下の黄色軽石目立つ
0
1m
1/40

第 15 図　土抗実測図



第 16 図　堀立柱建物跡・ピット・土坑出土遺物実測図

SC7は平面形円形プランを呈し、径1.5～1.2mで検出面からの深さ約10cmである。底面は中央が若干くぼんでいる。埋土から鉄滓（**32**）が1点出土した。

SC4は長径約1.15m、短径約1mの楕円形を呈し、検出面からの深さ約25cmである、底面はほぼ平坦である。土坑中央のやや西よりの埋土の上部にこぶし大の砂岩礫が1個検出された。この礫はこの土坑の上部に設置された何らかの認識ではないかと推察される。埋土からは、底部の切り離しがヘラ切りの土師器坏（**31**）が出土した。

SC5は長径約1m、短径約0.9mの楕円形を呈し、検出面からの深さ約18cmである、底面はほぼ平坦である。

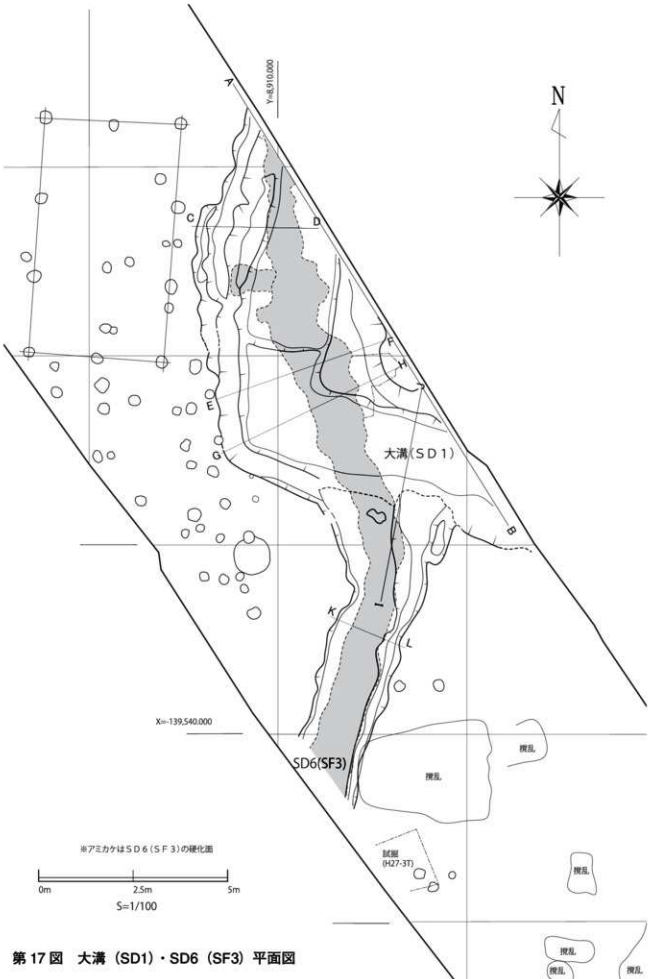
SC6は近現代の撹乱により大半が失われているため全形は不明である。検出面からの深さ約8cmである。埋土から出土した土師器坏底部が後述する**SD6（SF3）**から出土した土師器口縁部と接合した（**66**）。

（3）大溝（**SD1**）

大溝（**SD1**）は、調査区域の北側において大規模な黒色土の落ち込みとして検出された。この遺構は平成27年度の試掘トレンチ（**2T**）でとらえられていたが、この試掘調査の際には、遺構の堀底面を確認するには至らず、全容が不明の大規模な遺構とされていた。検出当初は、後述する溝状の道跡である、**SD6（SF3）**と接続するのか切り合いなのかがはっきりとしなかったが、先行トレンチによって埋土の堆積状況を確認していく過程で切り合い関係にあることが判明した。また、大溝（**SD1**）の上半部は**SD6（SF3）**によって多少の改変を受けている状況が看取されたものの、この遺構は調査区域内ではほぼ直角に曲がる堀状の区画溝の南西隅角部分にあたることが明らかとなった。本来の断面形はきれいな逆台形状をなすものと推定され、溝の堀底は鬼界アカホヤ火山灰層で掘り止めてほぼ平坦となる。そのせいか完掘状態では鬼界アカホヤ火山灰の橙色が鮮やかに映え、きわめて端正な印象を受ける。計測するポイントで若干の違いはあるが、隅角から北へのびる西辺の溝は検出面での幅約4.4m、深さ約1.5m、底面の幅約2mである。隅角から東へのびる南辺の溝は検出面での幅約3.3m、深さ約1.4m、底面の幅約1.5mである。南辺から西辺へ移行する部分で段差がつき、西辺の底面が一段下がっている。

大溝（**SD1**）の埋土の最下部には、壁際のみに薄く泥状の黒色シルトが堆積し、その上に黄色軽石と黒色シルトのラミナが互層となる。この層は壁際ほど厚くなっており、大雨時などの流水によって壁面が自然崩落した際に流れ込んだものと思われる。この層を含め溝底面直上からは遺物はほとんど出土していない。この層の上に堆積した薄い黒色シルトの上に特徴的な青灰色を呈する火山灰がレンズ状に堆積している。この火山灰層は層厚数cm未満と非常に薄いもので、明確に視認できないところもあったが、霧島火山群の火山灰（テフラ）であることが想定されたため、霧島御鉢起源の高原テフラ・宮杉テフラ・片添テフラの基準資料と蛍光X線分析を行って比較したところ、それらすべてと元素組成が比較的類似することが判明した（株式会社古環境研究所による）。今後、電子線マイクロアナライザ（EPMA）などを用いて測定対象となるテフラ粒子（火山ガラス・斑晶鉱物等）をターゲットとして化学組成分析を行ってより詳細な同定を行う必要がある。ちなみに霧島御鉢は『続日本紀』の延暦7年（788）の条に記載された噴火が知られているが、近世史料には、12世紀から13世紀にかけて爆発的噴火を繰り返していたことも記載されており、本火山灰は後者の時期の噴出物の可能性がある。今後は考古学による層位学的検討とともに各史料の詳細な検証も必要と思われる。このテフラの上位には、霧島御池起源の黄色軽石や鬼界アカホヤ火山灰の小塊を含む黒色土が堆積しており、自然崩落だけではなくある段階で人為的に埋め戻された可能性もある。この層を切るように後述する溝状の道跡である**SD6（SF3）**が掘削され、道を構成する硬化面（層）が構築されている。

確実に大溝（**SD1**）埋土からとされる出土遺物はきわめて少数であり、底面近くから出土したものは皆無である。大溝（**SD1**）出土遺物として図示したのは、**82～85**と**92～101**である。この中で先述した青灰色火山灰との層位関係がとらえられて同火山灰よりも下位から出土したものは、**82・92・94・95・96・97・98・99・100・101**である。**92～93**は底部の切り離しが糸切りの土師器坏である。**94**は土師器甕の口縁部であり、このほかに数点出土している。**95・96**は瓦器椀を模したような黒色土器である。**95**は口径18.9cmを測り完形に復元できるものの、都城市内の永田藤東遺跡**SD03**出土一括資料に含まれる同タイプよりもやや法量が大きめで口縁部が内湾気味である点が異なるものの、全体的な印象はかなり似通っている。永田藤東遺跡のものは11世紀後半から12世紀前半に位置づけられており、当該資料も近い時期の所産であると思われる。**97**は外面に平行タタキをもつ須恵器甕の胴部である。東播系であろうか。**82・83・98**は白磁椀、**84**は白磁皿、**99**は白磁壺である。**82・98**は大宰府分類白磁椀Ⅴ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）、**83**は白磁椀Ⅷ類（12世紀中頃～後半）、内面見込みに篦と櫛描きで繊細な草花文が施された**84**は白磁皿Ⅷ類（D期：12世紀中頃～後半）に該当する。**99**は大宰府貿易陶磁貯蔵具編年の中世Ⅰ期（11世紀後半～12世紀



第 17 図　大溝（SD1）・SD6（SF3）平面図

前半）か。85は94・95よりも６cmほど上位で検出された青磁椀底部である。大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ－2a類（D期:12世紀中頃～後半）に該当する。このほか、100は鉄鐸の欠損品と思われる。101は砂岩製の敲石である。大溝（SD1）の底面が堆積されていく過程で降下堆積した青灰色火山灰の下位から出土した土器・陶磁器は11世紀後半～12世紀前半のものが主体であるが、同火山灰上位からは12世紀中頃～後半のものも検出された。いずれにしても大溝（SD1）の底面直上からは年代を推定できる遺物は皆無であるため、その構築時期や機能開始時期については不明である。

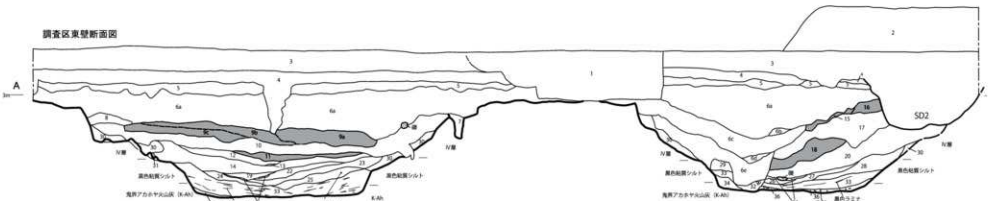
（4）溝状の道跡（SD6（SF3））

先述したように溝状の道跡としたSD6（SF3）は、検出当初は大溝（SD1）と接続して一体的に確認された。大溝（SD1）に先行トレンチを入れて埋土の状況を観察した結果、大溝（SD1）の埋土中位に硬化層が確認され、その硬化層がSD6（SF3）の底面を構成する硬化層にそのままつながることが判明し、SD6（SF3）が大溝（SD1）を切っている状況、すわなち、前者の掘削時期が後者よりも新しいということがわかった。SD6（SF3）は幅1.7～3m、検出面からの深さ38cmの箱堀状を呈しており、底面は東側壁面に沿った部分が一段深くなり側溝状となる。大溝（SD1）内では若干深くなり底面まで約70cmを計る。底面近くの硬化面の幅は1m程度であるが、場所によって広くなったり狭くなったりしている。また、大溝西辺の西側斜面が階段状となっているが、この部分の硬化面が西へ張り出している（硬化面の幅約50cm）。道から西側へのぼる出入り口的な施設の可能性がある。硬化層は大きく分けて３枚認められる。ある程度の時期幅で使用されながら、整備され続けたことを物語っている。溝幅は大溝南辺に接続する部分がやや幅広となり、大溝西辺の中を通りながら北へのびるが、掘削時に障害となった大溝屈曲部の内側隅角を削りとって走行している。

大溝（SD1）と重なる地点のSD6（SF3）から出土した遺物を第20図・第21図（82～85を除く）・第22図上半に掲示した。このうち第20図には、道の路面となる硬化層の上位に堆積した埋土から出土したものを図示した。これらはSD6（SF3）が道としての機能を終えた後に廃棄されたものと思われる。34・35・38は土師器坏、36・37・39は土師器小皿である。34・36・37・38は底部の切り離しが糸切りであり、35・39はヘラ切りである。40～44は東播系須恵器である。40はこれまで都城市内で出土例のなかった器種の椀であり、復元口径16.6cmと推定され、直線的な体部をもつ。41・42は片口鉢である。40・41は森田稔氏編年の第Ⅱ期第２段階（12世紀末葉～13世紀初頭）に該当する。43・44は外面に平行タタキのある甕胴部である。45は常滑焼甕の胴部である。硬化層中から出土した78と同一個体と思われるが接合しなかった。46～54は白磁である。46～48は大宰府分類白磁椀Ⅳ類である。49～52は大宰府分類白磁椀Ⅴ類か皿類と思われる。53は大宰府分類白磁皿Ⅳ類で、54は白磁壷の胴部であろう。55～58は青磁である。55は破片下端に櫛目文が認められる。大宰府分類の同安窯系青磁椀（D期：12世紀中頃～12世紀後半）である。56・57は大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。57は体部内面に轆刀による分割線と飛雲文が施されているので、細分類のⅠ－4類に該当する。58は龍泉窯系青磁皿Ⅰ類と思われる。59は縦方向の把手（実測図左面の下端に痕跡有）のついた滑石製石鍋を再加工したもので、短辺側の一端に円孔が認められるが、欠損している。いわゆる温石であろうか。60は鉄滓である。

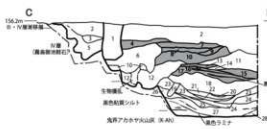
第21図と第22図上半にSD6（SF3）の硬化層中や硬化層下位の埋土最下部から出土したものを図示したが、硬化層下位とした遺物の中には、取り上げ時において大溝（SD1）の埋土上層との分別が困難なものがあった。例えば、67・68・69の土師器、86の滑石製石鍋、90の軽石製品などは大溝（SD1）の埋土上層に所属する可能性が高いが、ここで取り扱う。61・66・67・70・71・72は土師器坏、68・69は土師器小皿、73は土師器甕である。底部切り離しは、66・69・71・72は糸切り、61・67・68はヘラ切りである。復元口径13.35cmを測る66は土坑SC6から出土した破片と接合した。67・68はほぼ完形であり、67は口径12.05cm、68は口径8.85cmを測る。69は非常に浅いもので、復元口径7.8cmを測る。底面に特徴的なスノコ状圧痕が観察される。62・74～77は東播系須恵器である。片口鉢口縁部の74・75は森田稔氏分類の第Ⅲ期第1段階から第２段階との中間的な形態である。76・77は外面に平行タタキのある甕胴部である。78は常滑焼甕であり、先述した45と同一個体と思われる。63～65・79・80は白磁である。63は大宰府分類白磁椀Ⅵ類（C期：11世紀後半～12世紀前半）、65・79は白磁椀Ⅴ類、80は口縁外端部を押圧により刻みが施されている。白磁椀Ⅶ類か皿類であろうか。64は白磁壷の肩部と思われる。81は同安窯系青磁椀である。86は滑石製石鍋である。断面正台形状の鍔は垂れ下がらず、口縁部が鍔以下の胴部より分厚い。木戸雅寿氏による滑石製石鍋分類のⅢ－a類かⅢ－b類であろうか。87は砂岩製の敲石である。88・89は鉄滓で、91は棒状の鉄製品である。90は軽石加工品で実測図右面は使用により研磨されている。

調査区東壁断面図



A－B

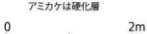
1：2015年試掘トレンチ
2：シラス盛土
3：攪乱砂質シルト
4：細灰色砂質シルト　5mm以下の黄色・白色粒石少量含む
5：1cm以下の淡白色粒石,淡灰色細粒火山灰,黒色シルトと褐灰色砂質土ブロックの混合
6a：黒色細粒質シルト　1cm以下の黄色粒石まんべんなく含む　やや しまる　植物・生物擾乱著しい　灰色の細粒火山灰の小ブロック
6b：1cm以下の著った酸化粒石
6c：基本的に6a層と同じ　やや軟質　下半に縞黒褐色粒石の小ブロック含む
6d：1cm以下の著った酸化粒石
6e：基本的に6a層と同じ　やや軟質
7：黒色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石含む　ぱらけやすい
8：黒色粘質シルト　酸化粒ブロック含む
9：黒灰(褐)色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石まんべんなく含む　酸化鉄の斑文有り　生物擾乱著しい　以下の３層に細分できる
9a：やや固くしまる
9b：非常に固くしまる
9c：下部に鉄分多く、固くしまる
10：細灰褐粘質シルト　2cm以下の黄色粒石含む　ブロック状になる部分少しあり　生物擾乱著しい(硬化面の可能,盛土?)
11：黒灰色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石多量に含む(目立つ)　非常に固くしまる
12：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石少量含む　生物擾乱あり
13：1cm以下の黄色粒石
14：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石少量含む　K-Ahかブロック少量含む　酸化鉄斑文あり　生物擾乱著しい
15：黒色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石含む(目立つ)　固くしまる
16：黒色細粘質シルト　2cm以下の黄色粒石含む(目立つ)　やや固くしまる
17：黒色細粘質シルト　1cm以下の黄色粒石含む
18：黒色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石含む（斑立つ）　固くしまる
19：黒灰色砂質土　黄色粒石含む　酸化鉄あり　固くしまる　鬼界色粘粒火山灰がまんべんなく散乱　微砂質シルト
20：黒色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石少量含む　灰色粘粒火山灰状まんべんなく散乱している
21：明灰色細粒火山灰+黒色微砂ブロック
22：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石含む(目立つ)　固くしまる
23：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石少量含む
24：黒色砂質シルト　1cm以下の黄色粒石多量含む
25：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石含む
26：黒色シルト(泥状)　1cm以下の黄色粒石極少量含む
27：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石含む
28：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石多量含む
29：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石多量含む　やや固くしまる
30：黒褐色砂質シルト　1cm以下の著った酸化粒石含む
31：細褐色砂質シルト　生物擾乱
32：黒色粘質シルト(泥状)　1cm以下の著った粒石とK-Ahブロック含む。
33：下半に2cm以下の黄色粒石　粒石と黒色シルトのラミナ
34：黒色シルトと著った酸化粒石のラミナ
35：黒色粘質シルト泥状



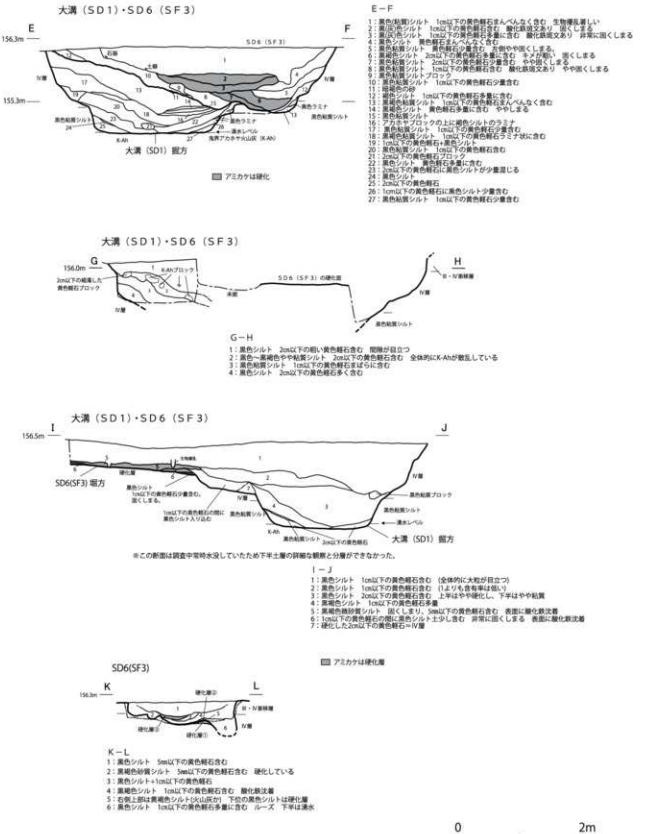
C－D

1：細灰色砂質土　1cm以下の黄色粒石含む
2：黒色(灰)シルト　1cm以下の黄色粒石をまんべんなく含む
3：1cm以下の黄色粒石(K-Ah)ブロック
4：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石含む　酸化斑あり　固くしまる
5：黒色シルト　1cm以下の褐色粒石含む　軟質
6：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石まんべんなく含む
7：黒色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石含む　酸化斑あり　固くしまる
8：1cm以下の黄色粒石,黒色粘質ブロック主体で、酸化斑あり　固くしまる
9：黒色微砂質シルト　1cm以下の黄色粒石含む　酸化斑あり　固くしまる
10：黒色細粘質シルト　1cm以下の黄色粒石を含む(目立つ)　酸化斑あり　固くしまる
11：黒灰シルト　1cm以下の黄色粒石含む(目立つ)　固くしまる
12：黒色シルト　K-Ahブロックの集積のようなところ　固くしまる
13：1cm以下の黄色粒石の中に黒色シルトが入る　黒色粘質シルトのラミナも入って固くしまる
14：泥質化
15：黒色シルト　1cm以下の黄色粒石含む　固くしまる
16：黒色粘質シルト
17：1cm以下の黄色粒石の中に黒色シルトが入る　黒色粘質シルトのラミナも入って固くしまる
18：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石含む
19：黒色粘質シルト　生物擾乱
20：鬼界アカホヤ火山灰（K-Ah）ブロック
21：黒色粘質シルト　黄色粒石少量含む。
22：青灰色細粒火山灰+黒褐色シルト
23：黒色粘質シルト　1cm以下の黄色粒石含む(目立つ)
24：黒色細粘質シルト　1cm以下の黄色粒石含む
25：黒褐色シルト　1cm以下の黄色粒石含む
26：1cm以下の黄色粒石の間に黒色シルトを含む
27：1cm以下の黄色粒石の間に黒色シルトのラミナ入る
28：2cm以下の黄色粒石

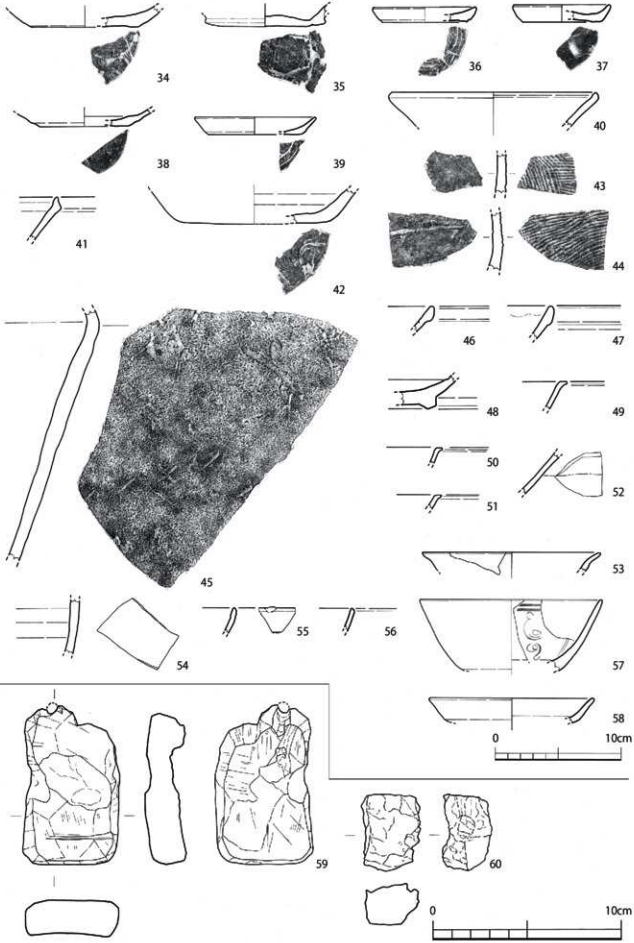
アミカケは硬化層



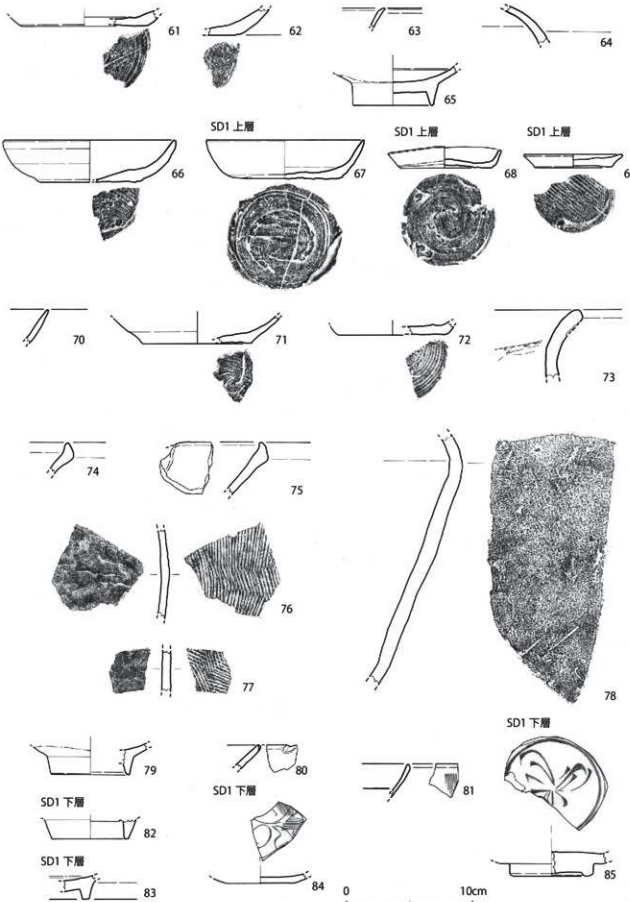
第 18 図　大溝（SD1）・SD6（SF3）断面図



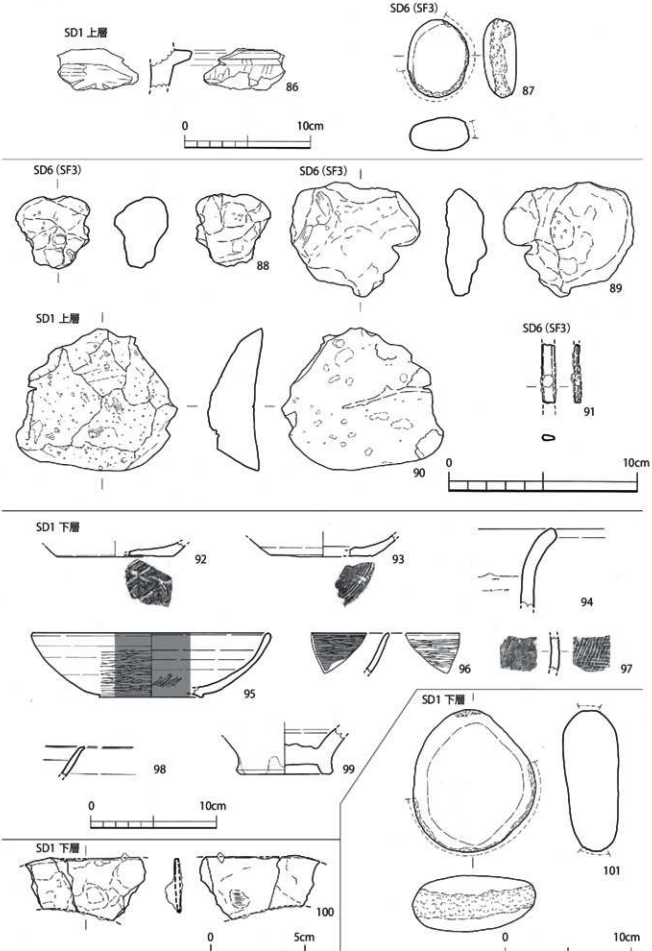
第 19 図　大溝（SD1）・SD6（SF3）断面図



第 20 図　SD6（SF3）　出土遺物実測図（1）



第 21 図　SD1・SD6（SF3）　出土遺物実測図（1）



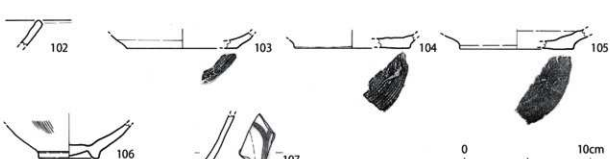
第 22 図　SD1・SD6（SF3）　出土遺物実測図（2）

大溝（SD1）と重ならない調査区西壁よりで検出されたSD6（SF3）の埋土から出土した遺物は第23図に図示した。104・106は最下部の硬化面直上から出土した。102は土師器坏口縁部、103～105は土師器坏底部である。底部切り離しは、103・104が糸切り、105はナデのため不明である。106・107は青磁椀である。106は大宰府分類同安窯系青磁椀、107は龍泉窯系青磁椀Ⅱ類である。

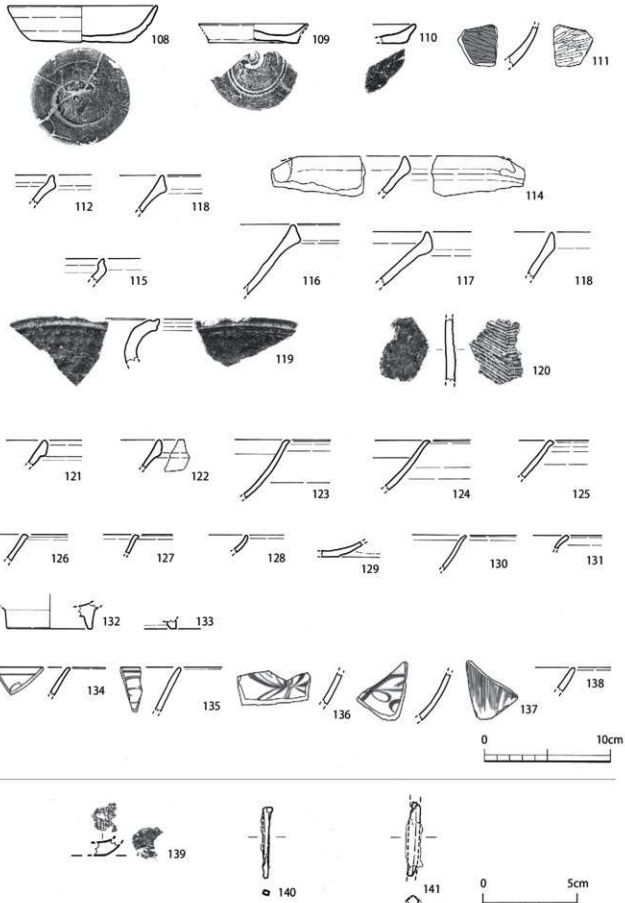
SD6（SF3）の硬化面を埋め立てた土の中からは、貿易陶磁器でみると、大宰府分類のC期（11世紀後半～12世紀前半）・D期（12世紀中頃～12世紀後半）・E期（13世紀前後～13世紀前半）と幅広く出土しているが、確実にF期（13世紀後半～14世紀前半）に下るものは認められない。また、硬化層とその下位もほぼ同様の状況である。ただし、先述した45・78の常滑焼甕だけは、口縁部がないために詳細な型式同定ができないものの、肩の張り具合から中野晴久氏分類の6a型式（13世紀後半）にあたる可能性がある。SD6（SF3）の構築時期を決めかねるが、大溝（SD1）埋土上層に含まれる可能性がある土師器のうち、最も新しく位置づけられそうな坏67と小皿69は、都城市内の加治屋B遺跡で基準とされた一括資料群と比較すると、坏の口径12～13cm、小皿の口径8cm前後のSC38・SC100一括資料のタイプに該当する。当該一括資料は13世紀前半～中頃に位置づけられているので、この年代をSD6（SF3）の上限年代の参考にすると、13世紀の中頃以降に構築された可能性があると考えられ、14世紀に入る頃には道として機能していなかったものと思われる。

(5) 包含層出土遺物

Ⅲ層から出土した遺物を第24図に図示した。108はほぼ完形の土師器坏であり、口径は11.8cmを測る。底部切り離しはヘラ切りである。109・110は土師器小皿である。復元口径8.6cmを測る109は非常に硬質であり、底部切り離しはヘラ切りである。110は摩滅が著しいため切り離しは不明である。111は瓦器椀を模したような黒色土器である。112～118は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。112・115は森田稔氏分類の第Ⅱ期第1段階（12世紀中葉～後半）、113は第Ⅱ期第2段階（12世紀末葉～13世紀初頭）、114・116～118は第Ⅲ期第1段階（13世紀代）に位置づけられる。118は土師質である。119・120は東播系須恵器甕である。119は口縁上面に凹線状のくぼみが認められ、頸部外面に施された斜め方向の平行タタキがナデ消されている。13世紀前半に位置づけられる。121～133は白磁である。121・122は大宰府分類白磁椀Ⅳ類、123・124・132は白磁椀Ⅴ類、125・126・127は白磁椀Ⅴ類か皿類、やや上質の130は白磁椀Ⅷ類、128・129は白磁皿Ⅵ類である。内外面ともに大きな貫入が認められる131は白磁椀ⅩⅢ類の可能性がある。134～138は青磁である。134～138は大宰府分類の龍泉窯系青磁椀Ⅰ類である。137は体部外面に縦の櫛目と片彫りの蓮弁文を入れ、内面に片彫草花文や櫛目文が施される。139は内面に布痕が観察される。いわゆる焼塩土器（製塩土器）の可能性がある。140・141は鉄釘である。



第23図　SD6（SF3）出土遺物実測図（2）



第 24 図　古代末～中世包含層出土遺物実測図

第５節　近世～近現代の遺構・遺物

(1) 溝状遺構（SD4）

SD4はかなりの部分を現代の撹乱坑によって壊されていた。検出当初は幅約２mの１条の溝としてとらえられていたが、掘り下げていく過程の埋土断面観察の結果、２条の溝が切り合いながら並行していることが明らかとなった。西側を走行する溝（SD4b）が新しく、東側を走行する溝（SD4a）を切っている。

SD4aは幅0.9m以上、検出面からの深さ約0.5m、溝底幅約20cmであり、断面形は逆台形状を呈する。SD4aが埋没したのちに、東側に沿って幅約1.2mの硬化層が帯状に形成されている。後述するようにこれは道跡（SF2）である。SD4aから出土した数少ない遺物のうち、145のみを図化した。肥前系染付椀の胴部である。外面に呉須による横方向の細線が描かれる。19世紀中頃～幕末のものと思われ、SD4aの年代もこの時期以降に位置づけられる。

SD4aを切るSD4bは幅約２m、検出面からの深さ約0.6m、西側斜面に段があり断面形は漏斗状となる。溝底の幅は約30cmである。SD4bの北側では埋土の上層に灰白色の粗粒火山灰のブロックが点在していた。このテフラの正確な同定は行っていないが、桜島大正テフラの可能性がある。142～144はSD4bの上層から出土した。142は瓦器椀を模したような黒色土器である。143は東播系須恵器甕の頸部である。144は中国産染付の青花磁器椀である。表面に大きな貫入が認められる。これらはSD4bとは明らかに時期差があると判断されるため、周辺の包含層から流れ込んだものと思われる。146はふいごの羽口である。先端にガラス状のスラグが溶着している。全体に欠損が著しく遺存状態は不良である。SD4bの機能していた時期は近代以降と思われる。

(2) 溝状遺構（SD3）

SD3もSD4と同じように、検出当初は幅約２mの１条の溝としてとらえられていたが、埋土断面観察の結果、２条の溝が切り合いながら並行していることが明らかとなった。西側を走行する溝（SD3b）が新しく、東側を走行する溝（SD3a）を切っている。

SD3aは幅0.75m以上、検出面からの深さ10cm程度の非常に浅いもので、断面形は皿状を呈する。148・149はSD3aの埋土上層から出土した。148は中国産染付の青花磁器皿であり、16世紀代のものと思われる。149は薩摩焼苗代川系の鉢であり、18世紀後半のものと思われる。SD3aが機能していた時期は近世後期以降に位置づけられよう。

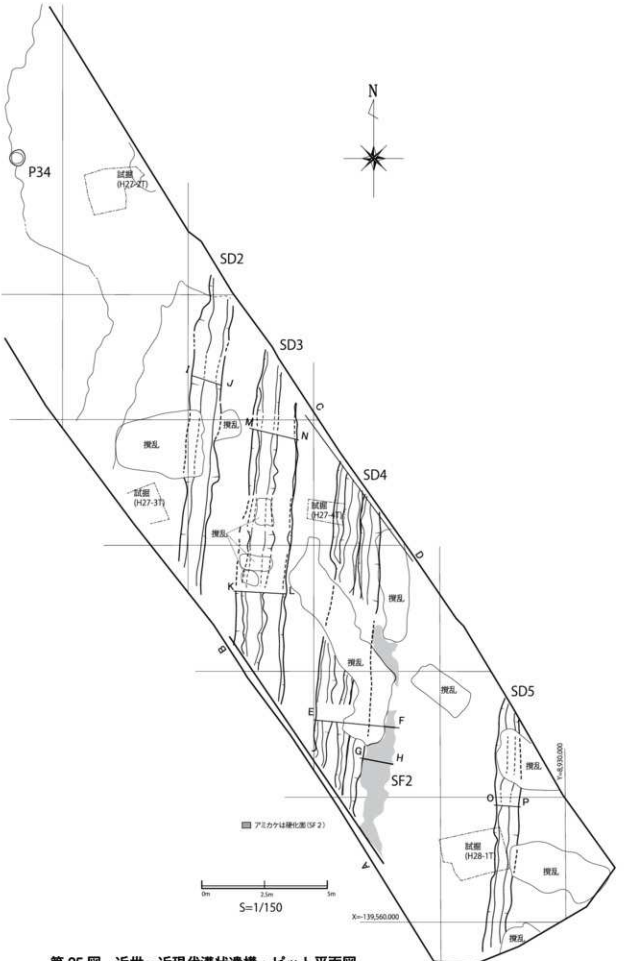
SD3bは幅約1.1m、検出面からの深さ約0.5mで断面形は逆台形状ないし漏斗状を呈する。147は龍泉窯系青磁椀Ⅰ類の口縁部である。表面は被熱により変色している。この溝状遺構が埋没する際に周辺の包含層から流れ込んだものであろう。SD3bは近代以降のものと思われる。

(3) 溝状遺構（SD5）

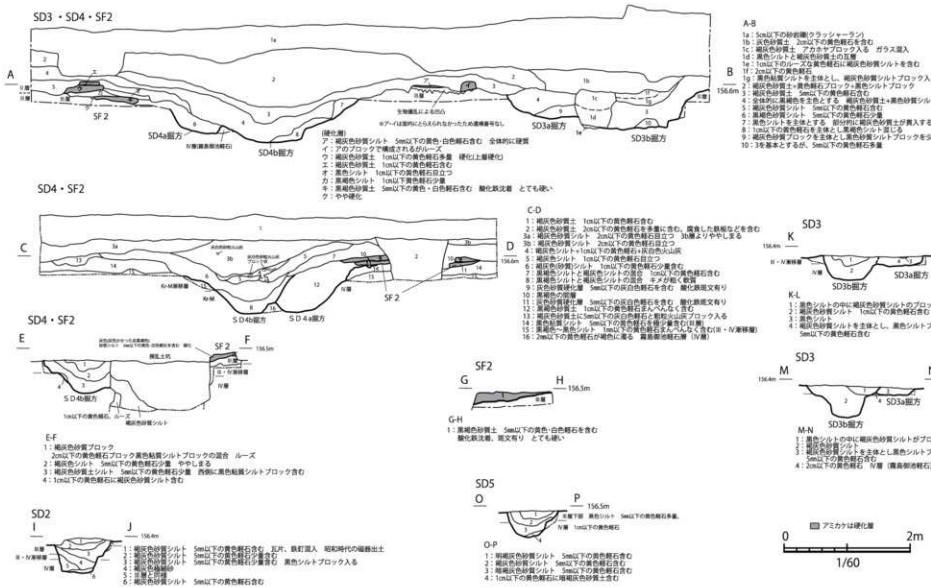
SD5は調査区南端部で確認された。幅約１m、検出面からの深さ約42cm、断面は「U」字状を呈する。埋土はSD4bと類似しているのでほぼ同時期のものと思われる。埋土から遺物は出土していない。

(4) 溝状遺構（SD2）

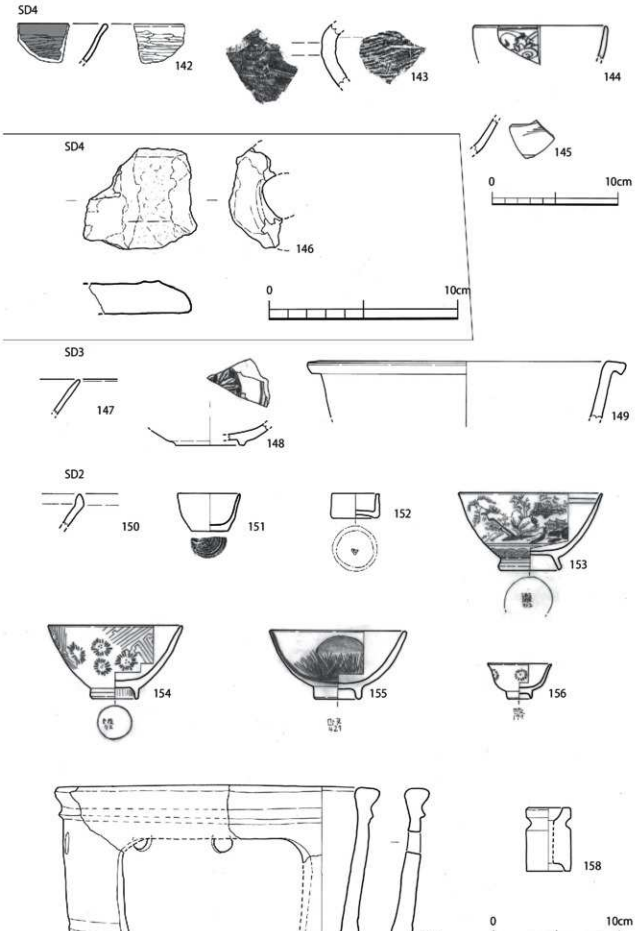
SD2は上記の溝状遺構群の中で最も西側を走行する。幅１～1.3m、検出面からの深さ約56cmであり、断面形は逆台形状を呈する。埋土の最上層から一括で廃棄されたと思われる陶磁器類や瓦などが多量に出土した。150～166は、SD2の埋土上層から出土した遺物をピックアップして図化したものである。150は東播系須恵器片口鉢の口縁部である。以下の遺物とは明らかに時期が異なるため、周辺の包含層から流れ込んだものと思われる。151は素焼きの土器小坏である。底部切り離しは糸切りであり、比較的硬質である。近世～近代にかけてのものと思われる。152は白磁の小鉢である。底面に三角形の記号のような刻印がある。153～156は国産染付磁器である。153～155は椀であり、156は小坏である。153の外面には手描きとスタンプにより黒色の絵付けが施されている。高台内底面に呉須によって漢字１文字（「瀬」か）とその下にアラビア数字（「712」）が付されている。154は外面に呉須によるスタンプ文が施されている。高台内底面に呉須によって判読できない漢字１文字（「岐」か）とアラビア数字（「72」か）が記されている。155は他と比べて厚手で重量感のあるもので、外面に鮮やかなコバルト呉須で草木、いわゆる正円子ピンクで太陽と思われる円文が描かれている。高台内底面には判読できない漢字１文字（「岐」か）とアラビア数字（「427」か）が陽刻されている。156は外面に呉須によるスタンプ文が施され、高台内面には判読できない漢字１文字（「岐」か）とアラビア数字（「177」）が陽刻されている。これらの高台内底面の記載は生産者別表示記号である統制番号を表記したものと思われる。アジア太平洋戦争時の1941（昭和16）～1946（昭和21）年頃の製品と考えられる。157は



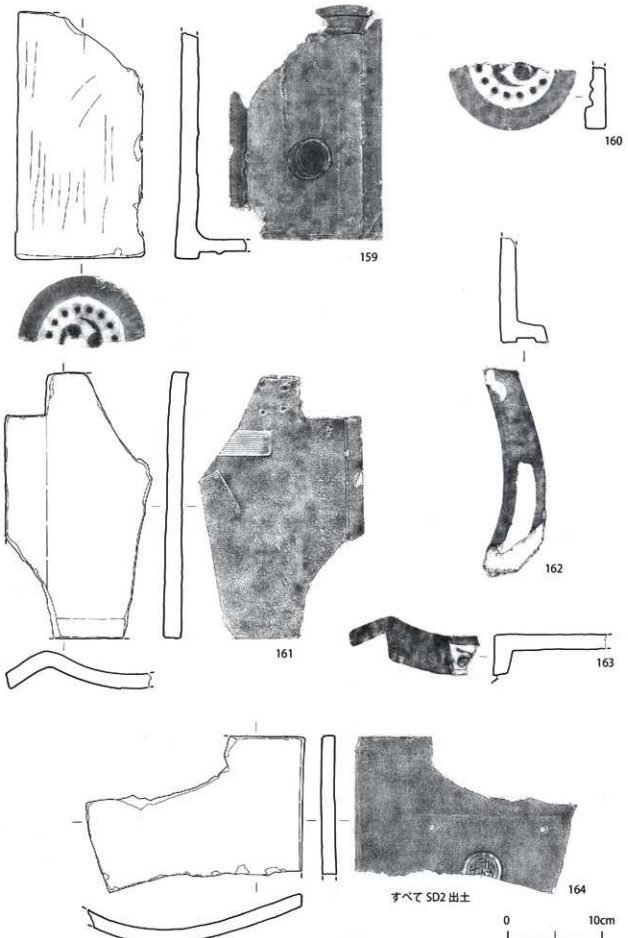
第 25 図　近世～近現代溝状遺構・ピット平面図



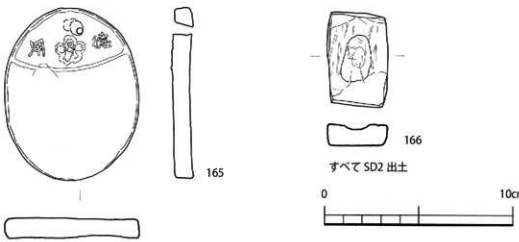
第 26 図　近世～近現代溝状遺構断面図



第 27 図　近世～近現代溝状遺構出土遺物実測図



第 28 図　近現代溝状遺構　出土瓦実測図



第29図　近現代溝状遺構出土遺物実測図

鍋物焜炉と思われる素焼きの土器である。キンウンモを含む特徴的な胎土から東海地方の製品と思われる。口径25.8cmを測り、体部に焼成前にあけられた空気取り入れのための円孔と焼口が施されている。内面にススが付着し、外面には煮こぼれによるとみられる痕跡が顕著である。白磁製の**158**は電線とその支持物との間を絶縁するための碍子である。**165**は扁平な素焼きの土器であり、上端に円孔が施されている。「徳用」と桜花の文様が陽刻されている。何らかの下げ札と思われる。**166**は陶器片の再加工品である。四辺が研磨され、片面にくぼみが認められる。用途は不明である。**159～164**は瓦である。**159・160**は巴文をもつ軒丸瓦である。**159**は内面に円形のスタンプが施されている。**162・163**は軒桟瓦である。**162**は無文であるが、**163**には唐草文が認められる。**161・164**は桟瓦である。**161**は切り込みがあり、裏面に施された方形スタンプの一つには判読できない文字が認められる。**164**の片面には円形スタンプの中に「協」という文字が確認できる。以上の遺物の年代より、**SD2**はアジア太平洋戦争後に埋め立てられ、廃絶したものと思われる。

(5) 道跡（**SF1・SF2**）

SF1は調査区域の北側で表土剥ぎ直後の清掃中に検出された。調査区域と平行するように、北西－南東方向に走行する。幅約26cm、硬化層の厚みは約2cmしかなく、南へ行くと不明瞭となる。

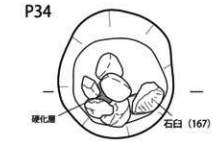
SF2は**SD4a**の東側に沿うように検出された。幅約1.2m、硬化層の最大厚は約15cmである。黒褐色の砂質土に黄色軽石・白色軽石粒を含む。酸化鉄の沈着が認められ非常にかたくしまっている。

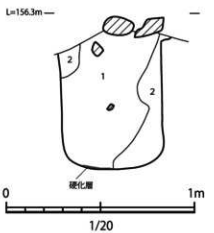
(6) ピット（**P34**）

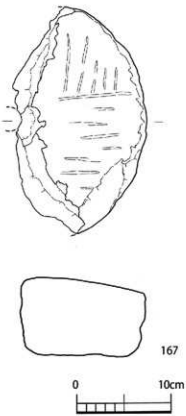
径約65cmの平面形ランを呈し、検出面からの深さは約0.7mである。埋土の最上部に砂岩や凝灰岩の礫群の集石が確認された。構成礫のうちの1点は石臼（**167**）であるが、全体的に欠損と表面の磨耗が著しい。二次的に利用されたものと思われる。ピット底面の一部が径10cm程度円形に硬化しており、何らかの重量物による圧力がかかっていたことがうかがわれる。

(7) 包含層出土遺物

Ⅱ層から出土した遺物を第31図に図示した。**168**は貿易陶磁器の陶器耳壺の耳（把手）と思われる破片である。古代末～中世の項目で記載した**19～21**と同じタイプと思われ、大宰府貿易陶磁貯蔵具編年の中世Ⅱ～Ⅲ期（12世紀後半～13世紀前半）に位置づけられると考えられるが、本来Ⅲ層に所属していたものがⅡ層に巻き上げられたものと思われる。**169・170**は調査区域南側のⅡ層から近接して出土した。いずれも唐津系陶器椀であり、17世紀末～18世紀代に位置づけられる。**169**は畳付以外の部分が全面に灰釉が施釉され、高台内底面はいわゆる兜巾（ときん）と呼ばれる突起状を呈する。鋼緑釉がかけられた**170**は内面見込みが蛇の目釉剥ぎされている。内山窯系のものと思われる。**171**は軽石加工品である。欠損しているため全形は不明であるが、上面に方形状の受け部が作られている。**172**は鉄釘である。断面形は円形であり、大きな傘状の頭部をもつ。上層からⅡ層に混入した可能性がある。

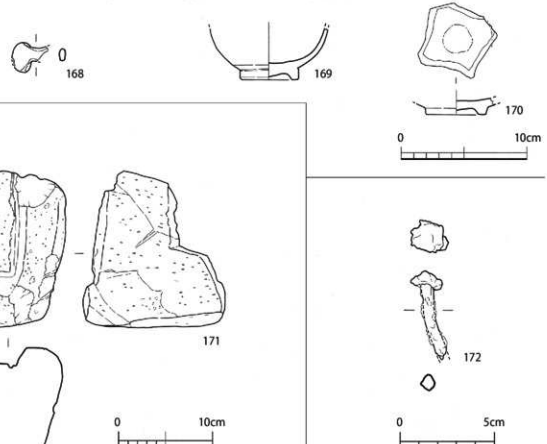






1：褐灰色砂質シルト　5mm 以下の黄色軽石・白色軽石を含む
2：1＋黄色軽石のブロック

第 30 図　近代ピット・出土遺物実測図



第 31 図　近世～近代包含層出土遺物実測図

第1表　郡元西原遺跡（第2次）出土遺物観察表 ①

掲載番号	取上番号	出土遺構 地点・層位	種別	器種	法量(cm) 口径	底径	器高	文様・調整 内面	外面	色調 内面	外面	胎土	備考
1	309	Ⅱ層	弥生土器	甕か	—	3.4	—	ナデ	ナデ	灰黄褐(10YR6/2)	橙(7.5YR6/6)	長石・輝石・礫	
13		SB1 P44 Ⅱ層	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙	浅黄橙	長石・赤褐色粒子	
14		SB1 P42 Ⅱ層	黒色土器	椀	—	—	—	ミガキ	ミガキ	黒	浅黄	長石	内面のみ黒色
15		SB1 P49 Ⅱ層	土師器	坏	—	9.2	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(7.5YR7/3)	にぶい橙(7.5YR6/3)	長石・輝石・褐色粒子	糸切り
16		P12 Ⅱ層	土師器	坏	—	8	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	灰褐(7.5YR5/2)	長石・輝石・黒色・褐色粒子	糸切り
17		P31 Ⅱ層	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙(10YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/2)	長石・輝石・黒色・褐色粒子	糸切り
18		P82 Ⅱ層	土師器	小皿	8.4	7	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	橙(5YR6/6)	にぶい橙(5YR6/4)	長石・輝石	ヘラ切り
19		P21 Ⅱ層	中国陶器	壺	—	—	—				灰オリーブ	灰色・黒色粒子	
20		P21 Ⅱ層	中国陶器	壺	—	—	—				灰オリーブ	灰色・黒色粒子	
21		P21 Ⅱ層	中国陶器	壺	—	—	—				灰オリーブ	灰色・黒色粒子	
22		P68	土師器	小皿	7.8	6.4	1.3	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/3)	灰黄(2.5Y7/2)	長石・輝石	ヘラ切り
23		P68	土師器	小皿	8.1	7	1.4～1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙(10YR7/3)	灰白(5YR8/2)	長石・輝石	ヘラ切り 見込みにスス付着
24		P68	東播系須恵器	鉢	32	—	—	横方向ナデ	ユビナデ	黄灰(2.5Y5/1)	灰(N6/0)	石英・長石・小礫	
26		SC1 Ⅱ層	土師器	小皿	8.4	6.8	1.8	ロクロナデ	ロクロナデ	橙(7.5YR6/6)	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石・輝石	糸切り
27		SC1 Ⅱ層	白磁	碗	—	—	—			灰白	灰白	黒色微小粒子	
28		SC2 Ⅱ層	土師器	小皿	7.1	5.8	1.1	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい橙(7.5YR6/4)	長石・輝石	糸切り
29		SC3	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙	にぶい橙	長石・赤色粒子	
30		SC3	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄	浅黄	長石	
31		SC4	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄	浅黄	長石・輝石	ヘラ切り
34	134	SD6(SF3) 上層	土師器	坏	—	8.8	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/3)	橙(7.5YR7/6)	長石・輝石・赤褐色粒子	糸切り
35	217	SD6(SF3) 上層	土師器	坏	—	9.3	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄(2.5Y8/3)	浅黄(2.5Y8/3)	長石・輝石	ヘラ切り 底部に酸化鉄付着
36	122	SD6(SF3) 上層	土師器	小皿	8.1	6.6	1.2	ロクロナデ	ロクロナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)	長石・輝石・赤褐色粒子・白色軽石	糸切り
37	227	SD6(SF3) 上層	土師器	小皿	7.7	6	1.4	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・輝石・赤褐色粒子	糸切り
38		SD6(SF3) 上層	土師器	坏	—	7	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄(2.5Y8/3)	灰白(2.5Y8/2)	長石・輝石・火山ガラス	糸切り
39		SD6(SF3) 上層	土師器	小皿	9.5	7.3	1.4	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(2.5YR6/4)	にぶい橙(2.5YR6/4)	長石・輝石	ヘラ切り
40	124	SD6(SF3) 上層	東播系須恵器	椀	16.6	—	—	横方向ナデ	横方向ナデ	黄灰(2.5Y4/1)	黄灰(2.5Y4/1)	長石	
41	180	SD6(SF3) 上層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	横方向ナデ	横方向ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石・輝石・礫	
42	265	SD6(SF3) 上層	東播系須恵器	鉢	—	12	—	ナデ	ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石・赤褐色粒子	糸切り
43		SD6(SF3) 上層	東播系須恵器	甕	—	—	—	ナデ	平行タタキ	黒(N2/0)	灰(N4/0)	長石	
44	118	SD6(SF3) 上層	東播系須恵器	甕	—	—	—	横方向ナデ 工具痕	平行タタキ	黒(N2/0)	灰(N4/0)	長石・礫	
45	192	SD6(SF3) 上層	常滑焼	甕	—	—	—	横方向工具ナデ	横方向工具ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい赤褐(7.5YR4/4)	長石・小礫・白色鉱物	
46	135	SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			明オリーブ灰	明オリーブ灰	黒色の微小粒子	
47	225	SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	
48	194	SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			灰白(10YR8/1)	灰白(10YR8/1)	黒色の微小粒子	
49		SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			灰白(10YR7/1)	灰白(10YR7/1)	黒色の微小粒子	
50		SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	
51		SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			灰白	灰白	少量の黒色微小粒子	
52		SD6(SF3) 上層	白磁	碗	—	—	—			灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)	黒色の微小粒子	
53	119	SD6(SF3) 上層	白磁	皿	14	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	輪花皿
54	195	SD6(SF3) 上層	白磁	壺	—	—	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	
55	99	SD6(SF3) 上層	青磁	碗	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	
56		SD6(SF3) 上層	青磁	碗	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり
57	129	SD6(SF3) 上層	青磁	碗	14.4	—	—			オリーブ灰	オリーブ灰	黒色の微小粒子	
58		SD6(SF3) 上層	青磁	皿	13	—	—			オリーブ灰	オリーブ灰	黒色の微小粒子	
61	298	SD6(SF3) 硬化面以下	土師器	坏	—	10.3	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄橙(10YR8/4)	長石・輝石・礫	ヘラ切り
62	295	SD6(SF3) 硬化面以下	東播系須恵器	鉢	—	—	—	—	ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y4/1)	長石	糸切り 使用による内面摩耗
63		SD6(SF3) 硬化面以下	白磁	碗	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5YR7/2)	黒色の微小粒子	
64	281	SD6(SF3) 硬化面以下	白磁	壺か	—	—	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	
65	234	SD6(SF3) 硬化面以下	白磁	碗	—	6.4	—			浅黄	灰白	黒色・白色の微小粒子	貫入あり
66	189	SD6(SF3) 硬化面以下、SC6	土師器	坏	13.4	8.4	3.4	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(2.5YR6/6)	灰黄褐(10YR5/2)	長石・輝石・礫	糸切り
67	275ほか	大溝 上層	土師器	坏	12.1	9.3	3.1	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄(2.5Y8/3)	灰白(2.5Y8/2)	長石・輝石・火山ガラス 赤色粘土がマーブル状に入る	ヘラ切り
68	182	大溝 上層	土師器	小皿	8.9	7.4	1.7	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(5YR7/4)	にぶい黄橙(10YR7/3)	長石・輝石・褐色粒子・白色軽石	ヘラ切り
69	197	大溝 上層	土師器	小皿	7.8	6.3	1.1	ロクロナデ	ロクロナデ	橙(5YR7/6)	橙(5YR6/6)	長石・輝石・赤褐色粒子	糸切り スノコ状圧痕
70		SD6(SF3) 硬化面以下	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/4)	浅黄橙(10YR8/3)	長石・輝石・礫	
71	249	SD6(SF3) 硬化面以下	土師器	坏	—	8.9	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/3)	灰黄褐(10YR5/2)	長石・輝石・赤褐色粒子・礫	糸切り
72	271	SD6(SF3) 硬化面以下	土師器	坏	—	8.6	—	ロクロナデ	ロクロナデ	橙(7.5YR7/6)	橙(7.5YR7/6)	長石・輝石・赤褐色粒子・礫	糸切り
73	198	SD6(SF3) 硬化面以下	土師器	甕	—	—	—	ナデ・ケズリ	ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	青黒(5BG2/1)	長石・輝石・赤褐色粒子・火山ガラス・白色軽石	
74	284	SD6(SF3) 硬化面以下	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	灰(N5/0)	灰(N5/0)	長石細粒	
75	237	SD6(SF3) 硬化面以下	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石	片口部
76	236	SD6(SF3) 硬化面以下	東播系須恵器	甕	—	—	—	ナデオサエ	平行タタキ	黒(N2/0)	灰(N4/0)	長石	
77	282	SD6(SF3) 硬化面以下	東播系須恵器	甕	—	—	—	ナデ	平行タタキ	黒(N2/0)	灰(N4/0)	長石・礫	
78	238	SD6(SF3) 硬化面以下	常滑焼	甕	—	—	—	横方向の工具ナデ	縦方向の工具ナデ	にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい赤褐(2.5YR4/4)	長石	
79	274	SD6(SF3) 硬化面以下	白磁	碗	—	6.2	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	高台外側スス付着
80		SD6(SF3) 硬化面以下	白磁	碗	—	—	—			オリーブ黄	オリーブ黄	黒色の微小粒子	貫入あり 輪花?外端部押圧による凹み
81		SD6(SF3) 硬化面以下	青磁	碗	—	—	—			灰オリーブ	灰オリーブ	黒色の微小粒子	
82	299	大溝 火山灰下位	白磁	碗	—	6	—					黒色の微小粒子	
83	241	大溝 下層	白磁	碗	—	—	—			灰白(5Y7/2)		黒色の微小粒子	
84	242	大溝 下層	白磁	皿	—	4.6	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	
85	255	大溝 下層	青磁	碗	—	6.6	—			明緑灰	明緑灰	黒色の微小粒子	
92	240	大溝 火山灰下位	土師器	坏	—	9.4	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/3)	灰白(10YR7/1)	ごく微細の長石・輝石・礫	糸切り 板状圧痕
93	268	大溝 下層	土師器	坏	—	8.4	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	浅黄橙(7.5YR8/4)	長石・輝石・礫	糸切り

第2表　郡元西原遺跡（第2次）出土遺物観察表 ②

掲載番号	取上番号	出土遺構 地点・層位	種別	法量(cm) 器種	口径	底径	器高	文様・調整 内面	外面	色調 内面	外面	胎土	備考
94	272	大溝 火山灰下位	土師器	甕	—	—	—	ナデ・ケズリ	ナデ	にぶい橙(5YR7/4)	灰褐(5YR5/2)	長石・輝石・火山ガラス・礫	
95	256	大溝 火山灰下位	黒色土器	椀	18.9	8.2	5.1	ミガキ	ミガキ	灰白(10YR7/1)	黒(10YR1.7/1)	長石・輝石・礫・ わずかに白色軽石	
96	273	大溝 火山灰下位	黒色土器	椀	—	—	—	ヨコナデ・ミガキ	ヨコナデ・ミガキ	黒(5Y2/1)	灰白(5Y8/2)	長石・輝石・礫・ わずかに白色軽石	
97	262	大溝 火山灰下位	東播系須恵器	甕	—	—	—	ナデ	平行タタキ	黒(N2/0)	灰(N4/0)	長石	
98	239	大溝 火山灰下位	白磁	椀	—	—	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	
99	257	大溝 火山灰下位	白磁	壺	—	7.6	—			灰~灰白	灰~灰白	黒色の微小粒子	
102	287	SD6(SF3)硬化面直上	土師器	坏	—	—	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	にぶい橙(7.5YR7/4)	長石・輝石	
103	97	SD6(SF3)	土師器	坏	—	8.6	—	ロクロナデ	ロクロナデ	にぶい橙(7.5YR7/4)	灰褐(7.5YR6/2)	微細な長石・輝石	糸切り
104	286	SD6(SF3)硬化面直上	土師器	坏	—	9	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/4)	にぶい黄橙(10YR7/4)	長石・輝石・ 少量の火山ガラス	糸切り
105	144	SD6(SF4)上層	土師器	坏	—	9	—	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄橙(10YR8/3)	浅黄橙(10YR8/3)	長石・輝石・ 少量の火山ガラス	
106	285	SD6(SF3)硬化面直上	青磁	椀	—	4.8	—			灰オリーブ(5Y5/3)	灰オリーブ(5Y5/3)	黒色の微小粒子	
107	143	SD6(SF4)上層	青磁	椀	—	—	—			灰オリーブ(5Y4/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	黒色の微小粒子	
108	83	Ⅱ層	土師器	坏	11.8	7.8	2.9	ロクロナデ	ロクロナデ	淡黄(2.5Y8/3)	淡黄(2.5Y8/3)	長石・輝石	ヘラ切り
109	30	Ⅱ層	土師器	小皿	8.6	7	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	浅黄(2.5Y7/3)	灰黄(2.5Y7/2)	長石・輝石・ 少量の白色軽石	ヘラ切り 底部に黒色物(タール)付着
110	50	Ⅱ層	土師器	小皿	—	—	1.5	ロクロナデ	ロクロナデ	灰白(2.5YR8/2)	浅黄橙(10YR8/3)	長石・輝石	糸切りか
111	152	Ⅱ層	黒色土器	椀	—	—	—	ミガキ	ミガキ	黒(5Y2/1)	灰白(5Y8/2)	長石・輝石・ 少量の火山ガラス	
112	154	Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石・小礫	
113	90	Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ~ナナメナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	灰黄(2.5Y6/2)	長石・輝石・小礫	
114		Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y4/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石	片口部
115		Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y6/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石細粒・礫	
116	92	Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	灰(5Y5/1)	灰(5Y5/1)	長石・輝石・礫	
117		Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石細粒	
118	136	Ⅱ層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	にぶい黄橙(10YR6/3)	にぶい黄褐(10YR5/3)	長石・輝石	
119	43	Ⅱ層	東播系須恵器	壺	—	—	—	ヨコ方向ナデ	平行タタキのちナデ消し	灰(N4/0)	灰(N5/0)	長石・小礫	
120	32	Ⅱ層	東播系須恵器	甕	—	—	—	ナデ	平行タタキ	黒(N2/0)	灰(N4/0)	長石・小礫	
121	157	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	
122	34	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰オリーブ(5Y6/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	
123	10	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	黒色の微小粒子	
124	48	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	黒色の微小粒子	
125	20	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰白(2.5Y8/1)	灰黄(2.5Y6/2)	黒色の微小粒子	
126	24	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	
127		Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰白(2.5Y7/1)	灰白(2.5Y7/1)	黒色の微小粒子	
128		Ⅱ層	白磁	皿	—	—	—			にぶい黄橙色 (10YR6/3)	にぶい黄橙色 (10YR6/3)	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり
129		Ⅱ層	白磁	皿	—	—	—			浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり
130	33	Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰白(5Y7/2)	灰白(5Y7/2)	黒色の微小粒子	化粧土あり
131		Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—			灰オリーブ	灰オリーブ	黒色の微小粒子	化粧土あり 釉の内外に貫入あり
132	380	Ⅱ層	白磁	椀	—	6.8	—			灰白		黒色の微小粒子	
133		Ⅱ層	白磁	椀	—	—	—				灰オリーブ	黒色の微小粒子	
134	12	Ⅱ層	青磁	椀	—	—	—			灰オリーブ(5Y5/2)	灰オリーブ(5Y5/2)	黒色の微小粒子	
135	2	Ⅱ層	青磁	椀	—	—	—			浅黄	浅黄	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり
136	19	Ⅱ層	青磁	椀	—	—	—			灰オリーブ(5Y6/2)	灰オリーブ(5Y6/2)	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり
137	6	Ⅱ層	青磁	椀	—	—	—			オリーブ黄	オリーブ黄	黒色の微小粒子	
138	8	Ⅱ層	青磁	椀	—	—	—			オリーブ黄	オリーブ黄	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり
139		Ⅱ層	布痕土器		—	—	—	布痕	ナデ	浅黄(2.5Y7/3)	浅黄(2.5Y7/3)		
142	156	SD4 上層	黒色土器	椀	—	—	—	ミガキ	ミガキ	黒(10YR2/1)	灰黄褐(10YR6/2)	長石・輝石	
143		SD4 上層	須恵器	壺	—	—	—	ヨコ・ ナナメナデ	平行タタキ	灰(N5/0)	黄灰(2.5Y5/1)	長石	
144	155	SD4 上層	青花	椀	—	—	—			灰白	灰白	黒色の微小粒子	漳州窯系
145	163	SD4a 上層	染付	碗	—	—	—			暗オリーブ灰	暗オリーブ灰		肥前系磁器
147		SD3	青磁	椀	—	—	—			オリーブ灰	オリーブ灰	黒色の微小粒子	釉の内外に貫入あり 被熱あり
148	168	SD3	青花	皿	—	5.4	—			明緑灰	明緑灰	黒色の微小粒子	
149	167	SD3	薩摩焼	鉢	25.2	—	—			オリーブ黒	オリーブ黒		
150	170	SD2 上層	東播系須恵器	鉢	—	—	—	ヨコ方向ナデ	ヨコ方向ナデ	黄灰(2.5Y5/1)	黄灰(2.5Y5/1)	長石細粒	
151		SD2 上層	近世陶器	小坏	5	2.8	3	ロクロナデ	ロクロナデ	橙(7.5YR6/6)	橙(7.5YR6/6)		糸切り 唐津産か
152		SD2 上層	近世磁器	小鉢	3.8	3.9	2			灰白色	灰白色		底部外面にスタンプ状の○印
153		SD2 上層	瀬戸美濃系磁器	碗	11.4	4.6	6.1						スタンプ印刷 コバルト呉須 高台内に「瀬712」
154		SD2 上層	瀬戸美濃系磁器	碗	10.6	3.4	5.8						スタンプ印刷 高台内に「岐(?)72」
155		SD2 上層	瀬戸美濃系磁器	碗	10.6	3.6	5.4						コバルト呉須 高台内に「岐427」の陽刻
156		SD2 上層	瀬戸美濃系磁器	小坏	5	1.8	2.8						スタンプ印刷 高台内に「岐177」の陽刻
157		SD2 上層		焜炉	25.8	22.9	12.5			にぶい褐(7.5YR5/4)	にぶい赤褐(5YR5/4)	長石・金雲母	外面に煮こぼれ痕あり
158		SD2 上層	近世陶磁器	碍子	3.5	3.5	5						
168		Ⅱ層	中国陶器	耳壺	—	—	—			灰黄褐(10YR4/2)	灰黄褐(10YR4/2)		
169		Ⅱ層	唐津焼	碗	—	4.7	—			灰白(5Y7/1)	灰白(5Y7/1)		畳付以外は施釉
170		Ⅱ層	唐津焼	皿	—	4.7	—			緑灰(10G6/1)			内山窯 銅緑釉 蛇の目釉剥ぎ

第3表　郡元西原遺跡（第2次）出土遺物観察表 ③（石器・鉄製品）

掲載番号	取上番号	地区名・層	種別・器種	法量				石材・胎土	備　考
				長(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)		
2	59	Ⅲ～Ⅳ層	使用痕のある剥片	5.4	7.3	1.5	39	硬質砂岩	
3	211	Ⅲ～Ⅳ層	使用痕のある剥片	7.2	9.3	2.5	166		
4	81+212	Ⅲ～Ⅳ層	剥片	6.1	8.1	4	112		
5	81	Ⅲ層	剥片	4.9	8.2	1.65	52		
6	82+149	Ⅲ～Ⅳ層	剥片	7.6	7.7	3.55	202		
7	149	Ⅲ～Ⅳ層	剥片	4.3	6	1.2			
8 9 10	54+77+147	Ⅲ～Ⅳ層	剥片	5.75	11.85	4.3	204		
11 12	53+146	Ⅲ～Ⅳ層	剥片	8.05	7.15	3	134		
25		P13	鉄製品	6.3	1.2	0.4	5		
32	110	SC7 Ⅲ層	鉄滓	4.5	4.8	2	60		
33	222	P82	台石	24.2	17.6	6.4	3400	砂岩	スス付着
59	117	SD6(SF3) 上層	滑石か	8.45	4.9	1.9	152	滑石	スス付着
60	196	SD6(SF3) 上層	鉄滓	4.1	2.6	2.1	75		
86	280	大溝 上層	石鍋	3.3	6.4	3.3	68	滑石	
87	233	SD6(SF3) 硬化面以下	砥石	6.2	4.3	2.6	110.0	砂岩	
88	247	SD6(SF3) 硬化面以下	鉄滓	3.8	3.8	2.8	48		軽石付着
89	283	SD6(SF3) 硬化面以下	鉄滓	5.6	6.8	2.1	99		木材の痕跡 軽石付着
90	267	SD6(SF3) 硬化面以下	軽石加工品	7.5	8.2	2.4	44	軽石	
91	269	SD6(SF3) 硬化面以下	鉄製品	3.1	0.9	0.3	2		
100	303	大溝 火山灰下位	鉄鏃?	6.4	3.5	0.25	16		わずかに木質痕
101	263	大溝 火山灰下位	砥石	11.9	9.7	4.4	615	砂岩	
140	45	Ⅲ層	釘	3.8	0.35	0.25	2		
141		Ⅲ層	釘?	3.9	0.7	0.7	4		
146		SD4	鞴の羽口	6	5.3	1.7	53	粘土	ガラス質の溶融したスラグ付着
159		SD2 上層	軒丸瓦	26.3	13.2	2.1	1270		
160		SD2 上層	軒丸瓦	6.6	13.4	2.2	210		
161		SD2 上層	桟瓦	23.3	15.5	1.7	920		
162		SD2 上層	軒桟瓦	11.6	21.4	1.8	755		
163		SD2 上層	軒桟瓦	12.3	13.9	1.6	446		
164		SD2 上層	桟瓦	16.5	23.2	1.6	640		
165		SD2 上層	土製品	9.1	7.2	1	90	長石・輝石・火山ガラス含む	
166		SD2 上層	陶器転用品	5	3.2	1.1	22		
167	307	P34	石臼	14.2	24.2	8.2	3200		摩耗により、擂り目不明瞭
171	84	Ⅱ層	軽石加工品	16.6	11.2	15	765		
172	216	Ⅱ層?	釘	4.7	1.7	0.9	5		

【出土遺物の同定に際し参考とした文献】（五十音順）

岩元康成　2012「鹿児島県内の平安時代の土師器供膳具の様相－川内平野の資料を中心に－」『研究紀要・年報　縄文の森から』第5号　鹿児島県立埋蔵文化財センター

岡本武憲　1995「九州南部」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

木戸雅寿　1995「石鍋」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

桒畑光博　2004「都城盆地における中世土師器の編年に関する基礎的研究（1）」『宮崎考古』第19号

桒畑光博　2008「中世について」『加治屋B遺跡（平安時代～近世編）』都城市文化財調査報告書第86集　都城市教育委員会

太宰府市教育委員会　2000『大宰府条坊跡ＸⅤ』陶磁器分類編

近沢恒典　2012「調査のまとめ」『王子原遺跡（第４次調査）』都城市文化財調査報告書第106集　都城市教育委員会

中野晴久　1995「常滑・渥美」中世土器研究会編『概説　中世の土器・陶磁器』真陽社

堀田孝博　2010「物の動きから見た都城盆地の境界性－古代後半期の陶磁器類を中心として－」地方史研究協議会編『南九州の地域経営と境界性－都城からの歴史像』雄山閣

堀田孝博　2012「宮崎平野部における平安時代の土器について－土師器供膳具を中心に－」『宮崎考古』第23号　日高正晴先生追悼記念号（上巻）

堀田孝博　2016「宮崎平野部の中世土師器」『平成27年度宮崎考古学会研究会　宮崎県央地域の考古資料に関する編年的研究Ⅱ　発表要旨』

宮崎県教育委員会　1994『鳩園（東霧島神社）遺跡』

山下大輔　2011「平安時代末～中世の遺物について」『永田藤東遺跡』都城市文化財調査報告書第102集　都城市教育委員会

第４章　まとめ

第１節　郡元西原遺跡第２次調査地点における土地利用の変遷

郡元西原遺跡第２次調査地点における土地利用の変遷を以下に記載する。

調査区域の北側で、河川礫の砂岩円礫を母材として、剥片を剥出する行為が行われたようである。剥片類は約4600年前の霧島御池軽石の上位に形成された黒ボク土（Ⅲ層）から検出されたが、当該地点では共伴する土器がなかったため、所属時期は確言できないものの、少し離れた地点のⅢ層から弥生時代中期の土器が出土しているので、その時期のものではないかと思われる。

この地点が本格的に利用されはじめたのは、平安時代末のことであり、大規模な区画溝（大溝SD1）が掘削された。この大溝は今回の発掘調査区域外の東側の空間を囲繞するものと推定される。鎌倉時代にはその区画溝の溝底を埋め立てつつ隅角を壊して南北に走行する道（SD6（SF3））がつくられたようである。平安時代末から鎌倉時代にはその周辺に掘立柱建物が構築され、土坑群がつくられた。しかしながら、室町時代に入る頃には、この地点における明確な土地利用がほとんど認められなくなり、15世紀後半の桜島文明軽石降下後は耕作地として利用された可能性がある。

近世から近代にかけては、南北方向に走行する溝が繰り返し掘削され、それに沿うように道もあった。昭和23(1948)年の米軍空撮写真をみると、これらの溝状遺構と同じ走向の住宅と耕作地の境界線と思われる帯状のラインが見えており、今回検出された溝状遺構群のラインが昭和時代前期までは機能していたと思われる。

以上の変遷を第２次調査区域の北西部に隣接する第１次調査の成果と比較すると（第32図）、第１次調査では、11世紀後半から16世紀までの各時期の遺構が検出されているが、11世紀後半～12世紀前半に位置づけられる遺構は土坑墓の可能性があるSC5のみで、当該期の遺物の出土も極めて少ない。他方、15世紀前後から16世紀にかけての溝状遺構は重なり合いながら多数検出されており（SD2・3・4・5・10・11・12・13・14など）、第２次調査区域よりも新しい時期、室町時代以降の利用頻度が高かったことがうかがわれる。

第２節　大溝（SD1）の機能と性格について

古代末～中世にかけての大溝（SD1）は、幅約4.4～3.3m、深さ約1.5～1.4m、底面の幅約２～1.5m、断面形が逆台形状をなすもので、先述したように区画溝としての性格が想定される。平坦な底面は鮮やかな橙色を呈する鬼界アカホヤ火山灰で掘り止められており視覚的な効果を醸し出しているようにも思われる。この遺構がどのくらいの空間を囲い込んでいるのかを把握するために、平成28・29年度に東側の区域を試掘調査した結果、隅角から東へ約50mまでのびた地点で止まることが判明し、北へは約30mの地点までのびていることが確認されたが、それより以北は撹乱が著しいためはっきりしない。その結果、今回発見されたこの遺構は、方形の空間を区画する溝の南西隅角部にあたることが裏づけられた。また、区画溝に囲まれた空間には、小規模な溝状遺構やピットが存在することもうかがわれる。大溝が構築された年代については、溝底面直上から使用開始年代を示す遺物は出土しなかったが、大溝の最下層には、周辺表土や溝の壁面を構成するテフラ・土壌が流水によって流れ込んだラミナ堆積が観察された。この状況は、掘削後はあまり溝浚いがなされず、さほど管理が行き届いた状態ではなかったことを示していると思われる。この層の上位には、霧島火山御鉢火口から噴出したとみられる火山灰が薄く堆積しており、その火山灰の上下の埋土から出土した遺物の年代によって、大溝の埋没が進んだ時期は11世紀後半～12世紀代であろうと推定された。その後は13世紀中頃に溝状の道（SD6（SF3））によって壊されたと思われる。

第２章第２節で述べたように、郡元西原遺跡が所在する郡元町は中世における島津院と呼ばれるエリアの中央に位置しており、万寿年間の11世紀前葉に大宰府府官の平季基によって立荘された島津荘の成立拠点であったと想定される。郡元西原遺跡第２次調査で検出された大溝（SD1）の機能していた年代は、11世紀後半～12世紀と推定されるので、島津荘が拡大期を迎えた院政期の島津荘中心域における現地経営拠点の外周を囲繞した区画施設の一部の可能性があると考える。しかしながら、この区画施設は13世紀以降も引き続き使用されたようすは認められず、その後は北郡元地区や南郡元地区などの各地に方形居館が構築され、拠点が拡散していく状況がうかがわれる。

都城市内において、平安時代の居宅等の区画施設としての溝状遺構は、大鳥畠田遺跡と馬渡遺跡で検出されている。大鳥畠田遺跡のものは、居宅跡の南側を区画するもので、幅約２m、深さ約30cmの断面形態はU字状でかなり浅いも

のである。馬渡遺跡のものは、北・東・南の三方を浅谷に囲まれた微高地の西側を遮断線となるもので、幅約2.1～1.5m、深さ約80cmの断面形態はU字状ないし逆台形状である。両遺跡の区画溝の年代は９世紀から10世紀の平安時代前期のものであり、郡元西原遺跡の大溝（SD1）よりも約１世紀古いものであるが、規模は２分の１以下であり貧弱な印象を受ける。

他方、都城市内では、鎌倉時代から室町時代にかけての方形居館の外周を画する溝状遺構も見つかっている。例えば、加治屋B遺跡のSD1・SD2・SD14（13世紀前半～14世紀前半）、松原地区第Ⅰ遺跡の第Ⅰ期の大溝（13世紀後半）、上大五郎遺跡のSE1（14世紀前半～15世紀前半）などである。これらを郡元西原遺跡の大溝と比較すると、ほぼ同規模かやや大きく断面形態はV字状となるものもあり、防御的な機能がより高いとみられる。

ところで、長崎県大村市の竹松遺跡において、郡元西原遺跡の大溝と類似する遺構が見つかっている。同遺跡で区画溝とされているものがそれで、幅３～４m、深さ1.3～１mの断面形は逆台形状を呈する。溝の南北の総延長が約108mで両端がほぼ直角に曲がり、その東側を囲い込むようなかたちである。溝の埋土から12世紀から13世紀終わりごろの貿易陶磁器の椀や皿、土師器の坏・皿、石鍋が多量に出土しており、区画溝の東側のエリアからは、総柱建物３棟、側柱建物４棟の合計７棟の掘立柱建物が検出されている。大村湾沿岸地域に営まれた彼杵荘の経営に関わった現地有力者の居館であるとの指摘もなされている。郡元西原遺跡の大溝よりもやや新しい時期のものであるが、断面形態と規模は似通っている。古代から中世にかけての拠点施設の区画溝の一形態として注目されよう。

【引用・参考文献】（五十音順）

宇野隆夫　2001『荘園の考古学』（シリーズ　日本史の中の考古学）　青木書店

遠藤　尚　1983『地形区分』『都城・北諸県地域土地分類基本調査　都城』

川畑敏則・堀内和宏　2016『大村市竹松遺跡の調査概要（古代～中世）』『９～11世紀における大村湾海域の展開－東アジア世界の中の竹松遺跡－発表要旨集・基本資料集』長崎県考古学会

川畑敏則・古門雅高　2017『大村市竹松遺跡の調査概要（古代～中世）』『平成29年度九州考古学会総会研究発表資料集』九州考古学会

斉藤孝治　1998『大学テキスト　日本の原状地』古今書院

重永卓爾　1996『鳥津木荘鳥津院・北郷の開発と日置氏』『南九州文化』第68号　南九州文化研究会

重永卓爾　1996『地形図・地名に中世史を読む鳥津木荘の開発拠点をめぐって』『地方史みやざき』№41　宮崎県地方史連絡協議会

大学康宏　2008『古代から中世の霧島火山群の噴火年代－宮崎県内の『霧島高原スコリア』を中心として－』『人類史研究』vol.14

泉畑光博　2009『鳥津荘は無主の荒野に成立したのか』『季刊南九州文化』第109号　南九州文化研究会

永山修一　2006『平安時代中・後期の薩摩国・大隅国と南島』『先史・古代の鹿児島通史編』鹿児島県教育委員会

野口　実　1997『鳥津荘の成立』『都城市史通史編自然・原始・古代』都城市

都城市　2001『都城市史』史料編　古代・中世

都城市　2001『都城市史』史料編　近世１

都城市　2004『都城市史』史料編　近世４

都城市　2006『都城市史』史料編　考古

都城市教育委員会　1989『松原地区第Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』都城市文化財調査報告書第７集

都城市教育委員会　1993『天神原遺跡』都城市文化財調査報告書第23集

都城市教育委員会　1995『丸谷地区遺跡群　上大五郎遺跡』都城市文化財調査報告書第31集

都城市教育委員会　2000『池ノ友遺跡（第１次調査）』都城市文化財調査報告書第49集

都城市教育委員会　2004『馬渡遺跡』都城市文化財調査報告書第62集

都城市教育委員会　2008『加治屋B遺跡（平安時代～近世編）』都城市文化財調査報告書第86集

都城市教育委員会　2011『永田藤東遺跡』都城市文化財調査報告書第102集

都城市教育委員会　2015『祝吉第３遺跡』都城市文化財調査報告書第116集

都城市教育委員会　2016『郡元西原遺跡・南畑遺跡』都城市文化財調査報告書第123集

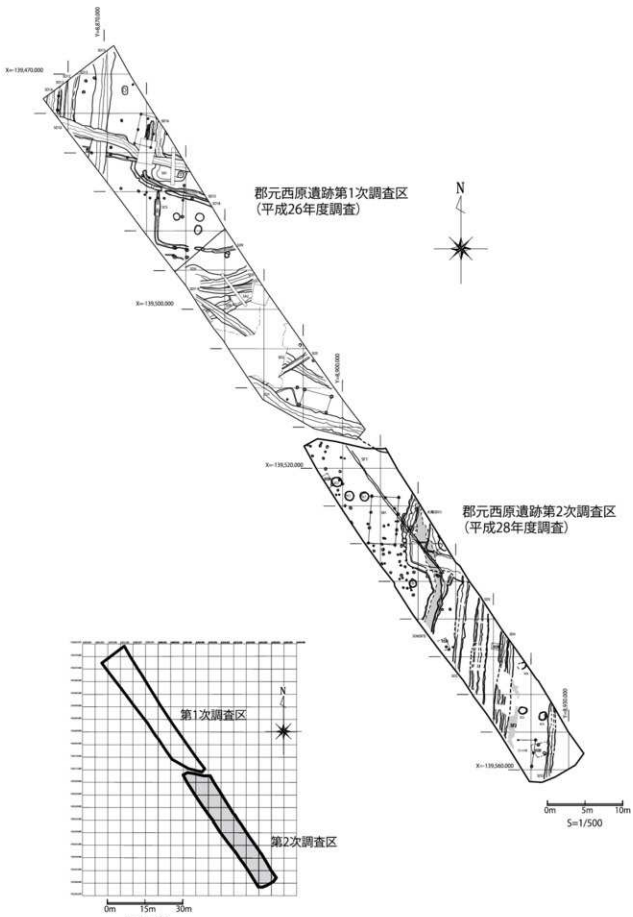
都城市教育委員会　2017『白山原遺跡（第２次調査）』都城市文化財調査報告書第130集

都城市教育委員会　2017『白山原遺跡（第３次調査）』都城市文化財調査報告書第130集

宮崎県教育委員会　1992『勝山・都元地区遺跡群』

宮崎県埋蔵文化財センター　2004『池島遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第84集

宮崎県埋蔵文化財センター　2008『国指定史跡　大島畠田遺跡』宮崎県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第178集



第 32 図　郡元西原遺跡第 1・2 次調査遺構接合図

一万城扇状地北部空撮写真（昭和 59 年空撮　西側上空から ）郡元西原遺跡は写真上よりの中央付近

郡元西原遺跡第 2 次調査区全景（真上から）

都元西原遺跡第２次調査区全景（北側上空から）

大溝（SD1）検出状況（西側上空から）

遺構検出作業風景

桜島文明軽石除去作業風景

桜島文明軽石の軽石と粗粒火山灰

ピット群検出状況

大溝（SD1）・溝状の道跡（SD6（SF3））検出状況

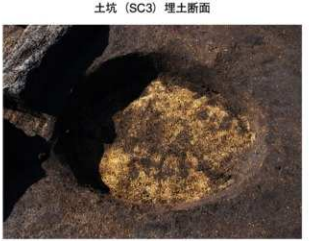
ピット列（P1・P2・P3・P6）

土坑（SC1）半截状況

土坑（SC2）

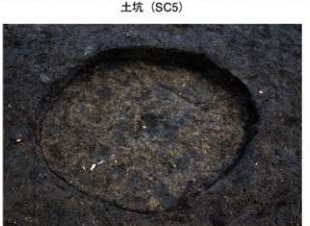
土坑（SC3）埋土断面

土坑（SC4）



土坑（SC5）

土坑（SC6）

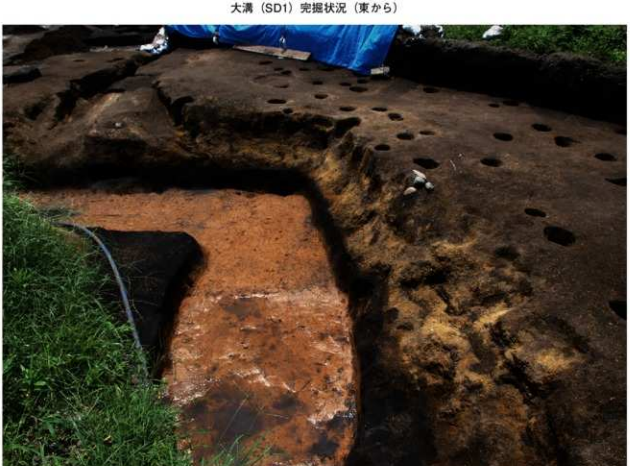


土坑（SC7）

大溝（SD1）埋土断面

大溝（SD1）完掘状況（西から）

大溝（SD1）完掘状況（東から）



大溝（SD1）完掘状況（北から）

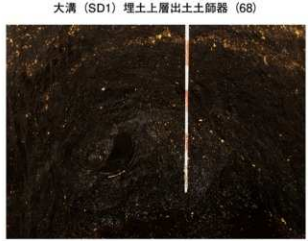
大溝（SD1）西辺の埋土断面

大溝（SD1）南辺の埋土断面

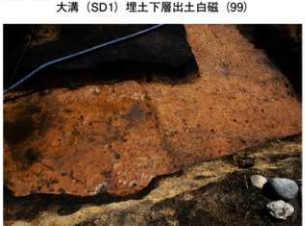
大溝（SD1）埋土下層断面の青灰色火山灰

大溝（SD1）埋土上層出土土師器（68）

大溝（SD1）埋土下層出土白磁（99）



大溝（SD1）埋土下層出土黒色土器（95）



大溝（SD1）底面の段差

SD6（SF3）出土陶器（45）

溝状の道跡（SD6（SF3））埋土断面

大溝（SD1）と重なる地点の SD6（SF3）硬化面

SD6（SF3）完掘状況

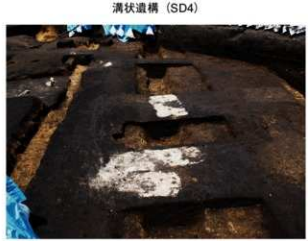
溝状遺構（SD4）検出状況

溝状遺構（SD4）埋土断面

溝状遺構（SD4）埋土断面

溝状遺構（SD4）

道跡（SF2）硬化層断面



溝状遺構（SD3）

溝状遺構（SD3）埋土断面

溝状遺構（SD3）埋土断面

溝状遺構（SD2）

溝状遺構（SD5）

溝状遺構（SD2）埋土断面

溝状遺構（SD5）埋土断面

ピット（P34）上部礫群

道跡（SF1）

1
2
3
4・5
14
19
20
24
22
23
35
37
25
32
33
36
40
41
44
46
49
53
45
80
57
58
81
106
107
59

67
68
69
92
93
86
90
84
85
94
95
96
98
99
97
100
108
109
114
116
117
119
121
135
130
128
131
124
136
137
139
140

144
145
146
149
148
151
152
153
154
155
156
157
159
158
164
165
163
168
166
169
167
170
171

報告書抄録

ふりがな	こおりもとにしばる　いせき　だいにじちょうさ
書名	郡元西原遺跡　第２次調査
副書名	市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	都城市文化財調査報告書
シリーズ番号	第134集
編著者名	染畑光博・近沢恒典・外山亜紀子・川俣唱子
編集機関	都城市教育委員会
所在地	〒885-0034　宮崎県都城市菖蒲原19-1　TEL　0986-23-9547　FAX　0986-23-9549
発行年月日	2018年３月23日

所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
郡元西原遺跡	宮崎県（みやざきけん）都城市（みやこのじょうし）郡元町（こおりもとちょう）	45202	M4023	31° 44′ 29″ 付近	131° 5′ 38″ 付近	H28.5.24 ～ H28.8.15	480㎡	市道改良事業

遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
郡元西原遺跡	散布地 集落跡 居館跡	弥生時代 平安時代 鎌倉時代 近世～近現代	 大溝 溝状遺構 掘立柱建物跡・ 土坑・溝状遺構・ 道路状遺構 溝状遺構 ピット	弥生土器・石器 土師器・東播系須恵器・白磁・青磁・鉄製品 国産陶磁器・瓦	平安時代末の大規模な囲繞施設である大溝の隅角部分が検出された。鳥津荘の現地経営拠点の一部である可能性がある。

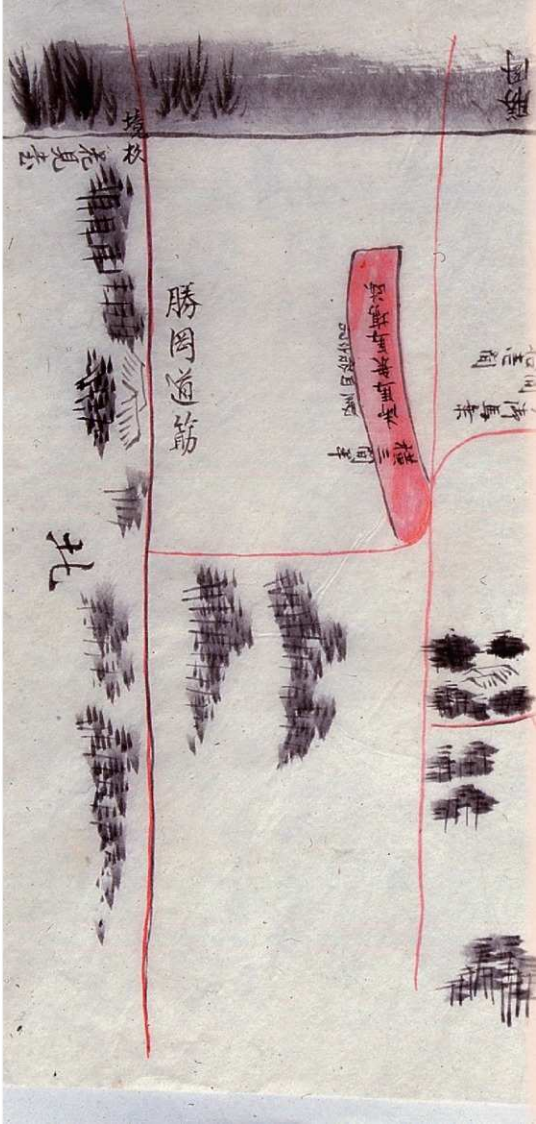
都城市文化財調査報告書第134集

郡元西原遺跡 第2次調査

－市道鷹尾上長飯通線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－

2018年3月23日

編集　宮崎県都城市教育委員会
発行　〒885-0034　宮崎県都城市菖蒲原町19-1
　　都城市役所菖蒲原町別館
　　TEL（0986）23-9547　　FAX（0986）23-9549
印刷　株式会社　都城印刷
　　〒885-0055　宮崎県都城市早鈴町1618番地
　　TEL（0986）22-4392　FAX（0986）22-4891



「祝吉御所跡の図」
（『庄内地理志』拾遺より）